胎動、受胎等の時日を問ひ内診、外診等によりて子宮及胎兒に起れる變化の狀態を確むることを要するなり

妊娠各月に於ける變化殊に子宮及び胎兒に起る變化は既に之を前に述べたれば之を參照すべし

第七十三節　妊婦の診察法

妊娠せる婦人を診察する方法を二つに分つ一を外診と云ひ一を内診といふ外診とは産婆が耳、目及手を用ゐて妊婦の全身の狀態、乳房、腹部、骨盤、子宮、外陰部、下肢及胎兒の狀態を檢するを云ひ内診とは手指を用ゐて骨盤内に於ける産道の模樣及び胎兒の狀態を觸知するを云ふ

其他診察中機會を見て、姓名、年齢、身分、近親及自己の健否、病あら

ば其狀態、月經の狀態、經産婦ならば既往の妊娠、分娩、産褥の經過及び今回の妊娠の經過等を尋ぬべし

總べて妊婦を診察するには前に述べたる母兒兩方に起る種々の變化をよく理會せざれば其診察して知り得たることも無益なり又熟練せざる間は其知り得る處甚だ確かならざることあれども注意して丁寧に診察をなすときは速に熟練するに至るものなり

診察に際しては秩序を守り、成るべく物柔かに丁寧なるべく叨りに長時間を要するは宜しからず又成るべく妊婦の身體を露出することを少くすべし

診察を受くるものには排尿して膀胱を空虛にせしむるを宜しとす時として妊婦又は産婦など自ら排尿したりと云ふも

猶膀胱内に尿の殘留することあり直腸の充盈も亦診察を妨ぐることあり故に注意を忽にすべからず

第七十四節　外診法

目に依るものを視診、手によるものを觸診又は按診、耳に依るものを聽診と云ふ

先づ妊婦の骨格、筋肉等のよく發育し居るや否や或は皮膚の血色の如何等によりて其強壯なるか病弱なるかを知り猶同時に骨盤の有様等をも知ることを得べし次には視診と按診とによりて乳房を檢し其形狀、大さ、乳嘴の哺乳に適するや否や、乳頭には損傷等の變化なきや否や、乳腺は能く發育せるや否やを確め終りに之を搾り初乳の出づるや否

やを見るべし

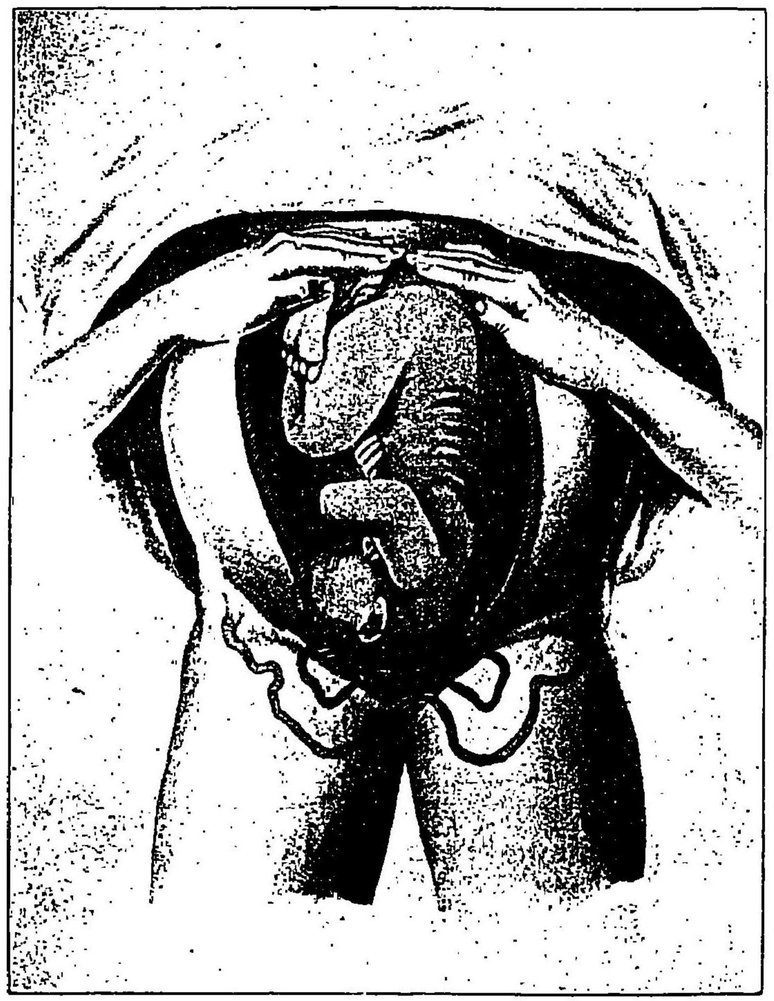
腹部は先づ衣類を解きて必要なる部分を露出せしめたる後温めたる兩手を徐かに腹部に貼し視診と按診とを同時に行ふ之によりて腹部の形狀及び緊張の度合、臍窩の形狀、白線の着色、妊娠線の有無、及び妊娠線の新舊、子宮の形狀、大さ、硬軟、緊張の度、羊水の多少等を檢し猶注意して胎兒の大さ、及び其身體の部分を觸知し以て胎位、胎向、胎勢を知り併て胎動を檢すべし

此外診を行ふには妊婦の側方に坐し次に述ぶる處の四段の法に依るを宜しとす若し然らずして叨りに順序を誤るときは所見は不明瞭を免れずして屢誤診に陷り易きが故に四段の法に依るのみならず精密なる注意を以て之を診査すべし

第一段は第四十九圖及び第五十圖に示すが如く手指を並べて腹部の兩側に置き徐かに上方に向ひて按觸すべし而して子宮底の位置の何れの邊にあるやを定むべし之を定むるには通常妊娠後半期に於ては臍窩或は胸骨の劍狀突起の尖端に依りて其中央或はその何れかを距ること幾指横徑の上又は下に位すと云ふ且同時に子宮底部には胎兒の頭部あるや臀部あるや小部分あるやを撿すべし若し子宮底部空虛なるを認めなば子宮の兩側に兒頭と臀部とを觸るゝや否やを檢査すべし其外猶胎兒の大さに注意すべし

第二段にては心窩部に置きたる兩手は之を側腹部に移し以て徐かに胎兒の小部分と背とを觸知すべし小部分は屈曲せる細き棒の如きものとして觸れ背部は弓狀に彎曲し一樣な

第四十九圖



外診の第一段を前面より示す

圖十五

外診の第一段を側面より示す

第五十一圖

外診の第二段を前面より示す

第五十二圖

外診の第二段を側面より示す

第五十三圖

外診の第三段を前面より示す

第五十四圖

外診の第三段を側面より示す

第五十五圖

外診の第四段を前面より示す

第五十六圖

外診の第四段を側面より示す

る硬度を有する抗抵ある部分として觸る之に依りて兒背の方向を知り胎兒の體向を定むることを得べく且第一段第二段の法によりて診察する間に子宮壁の緊張の度を注意すべし(第五十一圖及第五十二圖)

第三段は第五十三圖及第五十四圖に示すが如く右手にても左手にても診察に便なる一方の手を用ゐ拇指と示指との間を充分に開き骨盤上口の上に於て胎兒の下向部を靜かに兩指の間に觸るべし若し**頭部下向する時は**一樣に硬く球狀をなせるものを觸る而して少しく兩指を横に動かす時は恰も水中に浮したるゴム球に觸るゝが如く感ずること(**浮球の感**)あり是れ兒頭猶骨盤内に箝入せざる徵なり若し骨盤内に入る時は移動せず斯る場合には更に第四段の法にて精密に

検査すべし又不正なる形を有し軟かなるものに觸るゝ時は臀部なり若し頭部及臀部を通常よりも稍軟かに觸れ旦其部分の子宮壁厚きが如くに認めたる時は子宮の下部に胎盤の附着せるものなることを推知することを得或は骨盤上口の上の部分空虛にして頭部も臀部も觸知せざる時は胎兒の頭部と臀部を子宮の兩側に求むべし頭部は一樣に硬き球にして輕き衝突を子宮に加ふれば浮球の如き感を與ふ臀部も亦此感を與ふることあるも頭部の如く著しからず

此第三段の法は胎兒の下向部猶骨盤上口の上に在りや或は骨盤腔内に入れるやを定むるものにて甚だ大切なるものなり若し初妊婦の妊娠末期又は一般に分娩に際し胎兒下向部の多少骨盤内に進入せるが如き場合には第四段の法

に據るべし

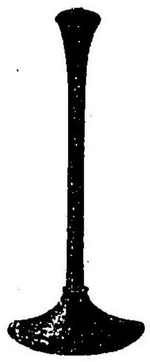
第四段の法は産婆必ず其背を妊婦の顔面に向けて坐するを便なりとす先づ兩手指を伸し之を鼠蹊部に於て骨盤の兩側壁に沿て徐かに深く骨盤内に挿入すること第五十五圖及第五十六圖に示すが如くなるべし頭部の下向せる時は硬き球狀のもの骨盤内を充すを見るべし併し猶更に精密に之を診する時は額部は圓形を帶び頤部は母體の上方に向へる突起として一方に項部は平坦にして直に後頭結節に接するを他方に觸れ得べし之に依りて猶先進部の如何なる狀態に骨盤内に入れりや又骨盤内何れの邊まで進入せるかを推知すること得べし

以上述べたる四段の方法に依る診察法は何れも精密なる注意

こ熟練こを要するものにしてこれのみにて内診をなさずして充分妊娠中に於ける胎兒の狀態は勿論分娩經過の有樣などを推定し得るを以て必ず輕卒なる檢査を行ふこと勿れ

其外猶骨盤の構造を檢せんが爲に脊柱彎曲の有無、骨盤骨の形狀、上腿骨に於ける異常の有無等を檢し更に外陰部に瘢痕、腫瘤又は疣贅等の存せるや否や、下肢に浮腫ありや否や靜脈瘤ありや否や等を檢査すべし

第五十七圖



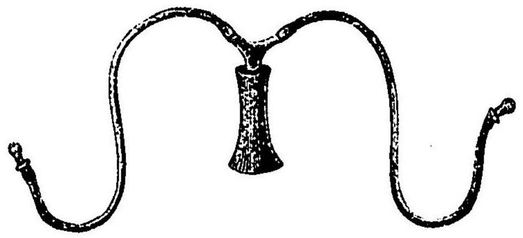
桿狀聽診器の圖

之より更に進みて聽診を行ふべし

聽診こは產婆自ら耳を用ゆるか或は聽診器を用ゆ耳を用ゆるこきは聽かんこ欲する部分に清潔なる布片を被ひ直に耳を貼すべし然れども通常は聽診器を用

ゆ聽診器には種々の形あれども當時我邦にて用ゐらるゝものは多くは圖に示す如きものなり一は第五十七圖の如く空洞をなせる棒の如き細き管の端に耳を貼すべき廣き一端こ聽診すべき部分に貼すべき圓錐狀をなせる一端こを具ふるものにして他のものは第五十八圖の如く聽診を要する部分に貼する一端を有する管ありて其他の端よりは長き二條のゴム管を出し其終端には耳内に挿入すべき小片を備ふり此形狀を有せるものにも種々の形あ

第五十八圖



兩耳聽診器の圖

此兩器の優劣如何は今茲に論ずる必要なきも余は前に述べたる方の桿狀の聽診器を以て產科用に適當なりと信ず其耳端の形狀又は聽診部位に貼する端の形狀等種々あるべきも其桿狀をなせる管の內部の太さ直徑六密迷(即ち二分)內外なるものを宜しとすゴム管を具ふるものは携帶に便なるを以て廣く使用せらる聽診器を用ゐて聽診を行ふには耳端を一耳に貼し或は兩耳に挿入し他の端を聽診せんと欲する部位に貼すべし總て聽診せんとするときは周圍を靜かにし意を專らにして之を聽くべし

妊婦を診察する時に聽き取り得べきものは次の如し

(一)胎兒の心音

(二)胎兒の運動に因りて起るもの

(三)臍帶の雜音

妊婦より發するもの

(一)子宮雜音

(二)大動脈音

(三)腸管雜音　等なり

胎兒の心音は胎兒の軀幹が子宮壁に最も近く存する處に於て最も明瞭に聽取し得るものにてトッ、トッ、トッと定期性に聞え之を算するときは一分間に百二十回乃至百四十回なるべし通常兒背ある部位に於て明かに之を聽くものなり

胎動によりて發する雜音は低くして短かく衝突するが如き音なり概ね同時に胎兒の運動を聽診器にまで傳達して觸知

することあり

臍帶の雜音は弱きズゥ、ズゥと云ふが如き響にして胎兒の心音と一致するものなり臍帶の輕き壓迫、捻捩或は結節するに由りて生ずるものなれども甚だ稀に之を聽くのみ

子宮雜音は子宮内にある血管の血液循環に因りて起るものにして其強さは種々なれども妊婦の脈搏に一致してズゥズゥと云ふが如き響なり子宮の兩側に於て聞くこと多し

大動脈音は時として聽取せらるゝ音にて妊婦の脈搏と一致して低き音を聞く又同時に大動脈の搏動を觸るゝことあり

腸管雜音は時として雷鳴狀なることあり或は泡沫の消ゆるが如きことありて一定せず是れ腸管内に於ける瓦斯が腸の蠕動に因りて動く爲に起るものなり

若し視診又は觸診に依りて骨盤に狹窄ありと考へらるゝ時は次に述ぶる方法に依りて計測を行ふべし

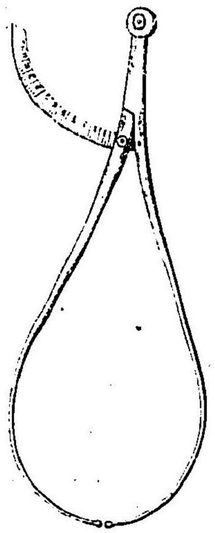
第七十五節　骨盤外計測法

骨盤を測定するには内外二種の方法あり内計測法には種々の困難あるを以て通常外計測法を行ひて骨盤腔の大小廣狹を推考す

外計測法の内にて必要なるものは次の如し之により骨盤上口の狹窄せるや否やを推定するを得べし

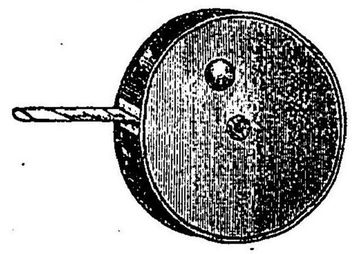
骨盤周圍を測定するには

第五十九圖



骨盤計の圖

第六十圖

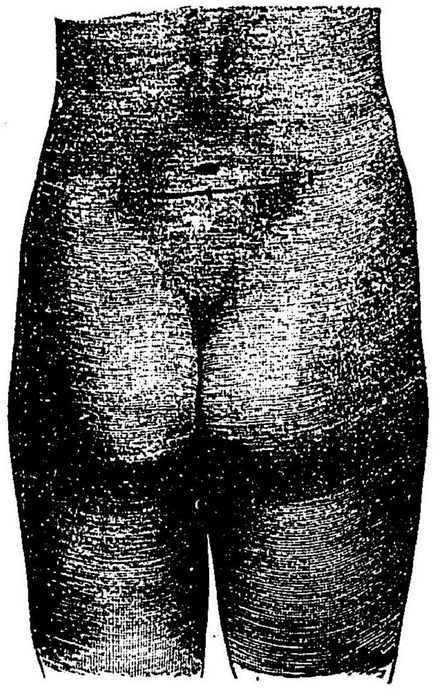


卷尺の圖

卷尺を用うるを便なりとす之を後方第五腰椎の棘狀突起の上に置き兩端をとりて前方に回はし上腿骨大轉子と腸骨櫛の間を通りて耻骨地平枝に沿ひて耻骨縫合に於て合すべし其大さは各人の肥滿せると痩創せるとにて少しく異なりと雖ども約七十五乃至八十仙迷(大凡二尺五寸乃至二尺八寸)なりとす其他の徑線を測定するには骨盤計を用う骨盤計は第五十九圖の如きものにて一端に關節ありて其傍に劃度板あり他端は二個の鈕ありて自由に開閉するを得其開きたる二個の鈕の距離は劃度板の上にて知ることを得るものなり今骨盤計の兩脚を開きて測定せんとす

る距離又は徑線の兩末端に此鈕を置く時は其距離は劃度板に於て直に何仙迷又は何寸なることを知り得べし其各徑線の測定法は次の如し

第六十一圖



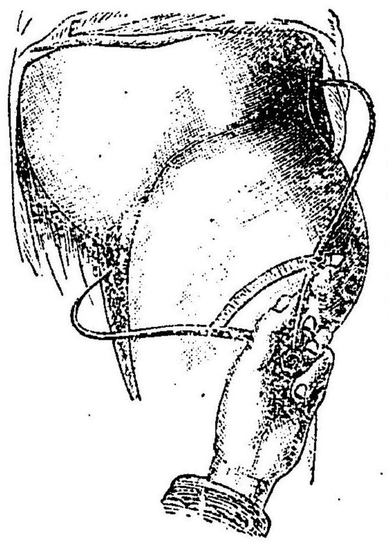
腰部にある斜方形の凹陷を示す

腸骨前上棘の距離は兩側の前上棘を探り求め各其中央に骨盤計の鈕を置く時は之を知り得べし前上棘を求むるには鼠蹊部を外上方に向ひて探るときは著しき突起こし

て容易く觸るゝものなり其距離平均約二十三迷仙(凡七寸五分)なり

腸骨櫛の最大距離は前上棘より腸骨櫛の緣に沿ひて鈕端を摺らし其距離の最大なる處を測るべし其長さ平均約二十六仙迷(凡八寸五分)なり此等の距離を測る際には兩手を以て骨盤計の兩脚の下に入れ指頭を以て測定點を端を握り鈕を示指又は中指の下に求め然る後其部分に鈕を貼するを便なりとす

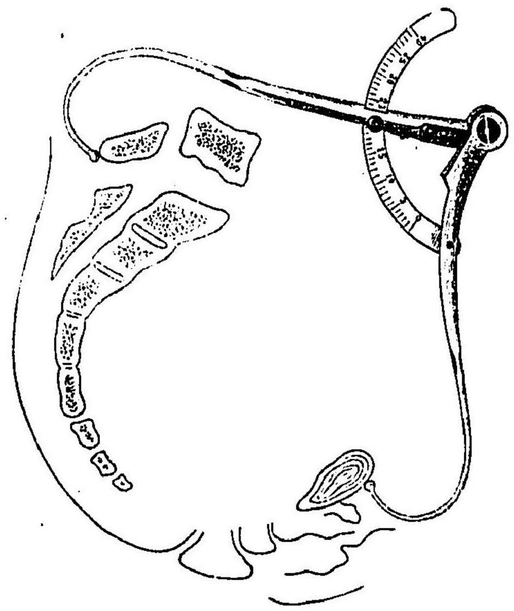
第六十二圖



骨盤計を用ひて外結合線を側定する狀を示す圖

外結合線(又は外直徑線)は第五腰椎棘狀突起の尖端より耻骨縫合の上緣に至る距離を云ふ耻骨縫合の上緣は容易に之を見出し得べきも第五腰椎の棘狀突起は之を見出すに多少の困難あり然れども通常は臀部の上、腰部の中央に斜方形の陷凹ありて其左右兩側の角は恰かも腸骨の後上棘の位置に相當す之によりて腸骨の兩後上棘を見出し之を結合したる線の中央に於て通常一個の棘狀突起を觸れ猶其直に上方にありて

第六十三圖



骨盤部の縱斷面に由りて外結合線を測定する點を示す

少しく強く隆起せる棘狀突起あり之れ即ち求むる處の第五腰椎の棘狀突起なり故に其尖端に一の鈕を加へ前方耻骨縫合の上緣に他の鈕を加ふれば其距離を見出し得此際には鈕を加ふるに先ちて第五腰椎棘狀突起尖端の部は朱墨又は蠟筆等を用ゐて記號をなすか或は介助するものに指頭を以て其處を輕く押へしむる時は計測殊に容易なりとす其長さ平均約十九仙迷(大凡六寸三分)なりとす

左右外斜徑線は一側の腸骨後上棘より他側の腸骨前上棘に至る距離にして其距離平均約二十仙迷(大凡六寸六分)なり

大轉子間距離とは兩側上腿骨大轉子の距離にして上腿外側面を腸骨櫛より下方に向ひて求むれば容易なり其距離は大凡二十八仙迷(大凡九寸二分)なり

以上計測の結果に由りて略骨盤上口の廣狹を知り得べし即ち腸骨前上棘の距離と腸骨櫛間距離の共に縮小せるときは骨盤上口の横徑が狹小なりと推定し得べく外結合線の短縮は骨盤上口縱徑(又は眞結合線)の狹小を、外斜徑線の短縮は骨盤上口の相當せる斜徑線の短縮を推知し得べし又大轉子間距離の短縮は骨盤濶の横徑線の短縮を推知し得べし若し計測の結果平均の計測數よりも小なるときは骨盤狹窄せるものと考へ得べきを以て醫師に指圖を乞ふべし然らざれば娩產に臨みて甚しき不幸を見るの虞あり

第七十六節　內診法

內診は必ず清潔に消毒をなしたる手指を以て謹愼して之

を行ひ一定の法則を守り決して之に背きたる處爲あるべからず然らざれば妊婦又は産婦の狀態を檢査し之に依りて妊婦又は産婦に適當なる介助を與へ平易に分娩を終らしめんとする大切なる目的に反し却て婦人の健康を害し甚だしきに至りては其生命を危くすることあるものにして若し斯ることを生じたる場合には道德上の罪人となるのみならず法律上の責も亦免かるゝこと能はざることあり故に注意の上にも注意し謹愼の上にも謹愼を加へざるべからず

故に産婆は妊婦又は産婦に接するには常に清潔を守らざるべからず殊に内診の際には充分に消毒清潔の方法を盡さゞるべからず

世俗一般に消毒と云へば消毒藥液に手を浸し或は器械を浸すを以て足れりと考ふれども單に此等の方法のみにては完全なる消毒と云ふことを得ず又方今行はるゝところの消毒法にても手指の清潔消毒法は殊に困難なりとす是れ手指には他の器械等の如く高度の熱又は蒸瀉などを以て消毒を行ふことを得ざるを以てなり故に第一編第三章に述べたる方法に從ひ常に注意して不潔なるものに觸れず且時に臨みては綿密なる消毒法を行ふべし

而して消毒によりて清潔となりたる手指器械等にても一度他の消毒を行はざるものに觸るれば再び消毒清潔法を行ふにあらざれば危險の虞なしと云ふを得ず故に用を終るまでは決して消毒せざるもの又は消毒したるも

のにても必要なきものに觸るべからず

内診を行ふには法に從ひて外陰部を清潔にしたる後充分よく消毒したる手指(通常は示指のみ必要ある時は示指、中指)を用ゐ消毒藥液にて潤ひたるまゝ之を拭ひ又は乾かすことなくして五%石炭酸ワゼリン又は石炭酸オレーフ油又は殺菌せるワゼリン又はオレーフ油を塗布し他手の拇指と示指とにて陰唇を哆開し然る後徐かに膣の後壁に沿ひて深く膣内に挿入すべし而して膣穹窿部に達せば更に子宮膣部、子宮口、頸管等の狀態を檢し若し子宮口又は頸管開きたる時にも粗暴に之に觸接することなく殊に胎胞の存せるときには之を破ざる樣注意することを要す又陣痛既に始まれる場合には必ず陣痛間歇時に於て診察をなし若し内診中

に陣痛發作あらば靜かに其歇むを待つべし且餘り長時間に渉る内診を行ふべからず是等の法則は充分注意して之を守り叨りに粗暴なる内診をなすべからず爲めに種々の異常を來し不幸なる結果を見ることあり

内診を施こすには仰臥せしむるを宜しとす而して其兩脚は少しく開き股關節及膝關節に於て中等度に屈曲せしむべし先づ膣内に挿入せる指に由りて膣腔の粘膜に異常なきや否やを檢し更に前膣穹窿部に於て胎兒の先進部を觸れ、胎兒の何れの部分先進せりや其移動し得べきや或は既に骨盤内に固定せるやを檢し然る後子宮膣部に至り其既に消失せるや猶存せるやを知り若し存在するときは其長さ及び形狀を認め次に子宮外口に至りて其哆開せるや否や其形狀及

其前後兩唇の厚きか既に薄くして鋭き緣を有するや或は緊張せるか弛緩せるかを觸知すべし若し分娩開始し胎胞子宮内に存する時は其緊張の度並に厚さ等に注意すべし固より前に述べたる如く之を破るべからず若し既に胎胞破裂せる後ならば注意して先進部の骨盤に對する關係を檢せざるべからず此點に就ては更に分娩時の診察法を說くこゝ詳に述べし

既に子宮腟部、子宮口等の狀態を觸知し得たる後は骨盤腔の充分なる廣さを有するや否やを檢し最後に會陰の柔軟にして伸張し易きや否やの性質を檢すべし

骨盤腔の濶さは內診する手指に依りては只其大體を知り得るのみ然ども容易に指を薦骨岬に達し得べき場合あらば

骨盤狹窄せるものなることを知るべし

即ち普通內診に由りて知るべき要件は

(一)會陰及び腟、子宮頸管の性質殊に其伸張し易きや否や

(二)骨盤腔は狹窄せりと認むべきや否や

(三)胎兒の先進部は何れの部分にして骨盤に對して如何なる關係に在りや

(四)妊娠の終期ならば分娩既に開始せるや否や等の諸點なりとす固より必要なる場合には經產と初產との區別等をなすべきことあり

總て診察の所見は之を記憶すべきものなれば寧ろ之を記錄して保存するを宜しとす

第七十七節　初妊と經産との鑑別

既に前に述べたる處の徴候を丁寧なる診察によりて檢すれば容易に初妊と經産との區別をなすことを得べきも此鑑別は時として困難を免れざるものなれば更に之を繰返して述ぶべし

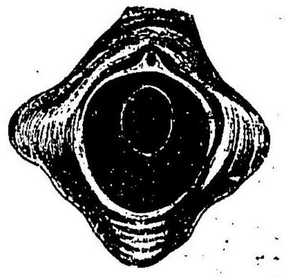
妊娠と分娩との爲に生じたる種々の變化の中には後に至りても其痕跡を殘すものあれば之に依りて鑑別をなす

乳房は初妊婦にては緊張して懸垂することなきを通常とすれども經産婦に在りては弛緩して懸垂し乳頭も亦弛緩して長きを常とす

腹壁の緊張も亦初妊婦にありては強く經産婦にては弛緩す妊

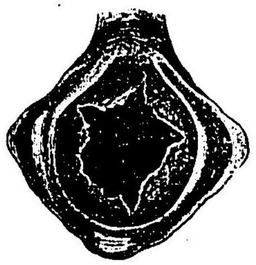
娠線あるときは初妊婦にては藍赤色の新妊娠線あるも經産婦にては白くして光澤ある舊妊娠線と猶其他に新妊娠

第六十四圖



處女に於けるも少し缺損なき處女膜を示す

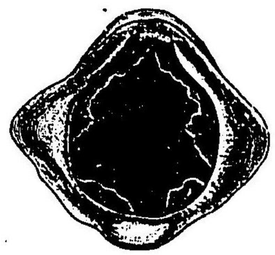
第六十五圖



分娩以前に於ける處女膜を示す

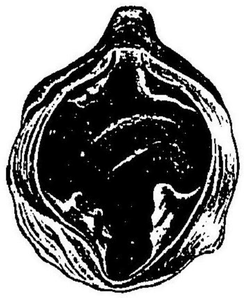
交接の爲めに圓形の孔は變して截痕となる孔を有する

第六十六圖



一回の分娩を經たる處女膜を示す

第六十七圖

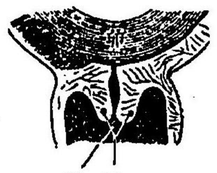


數回の分娩を經たる處女膜を示す

腟壁は弛緩し陰裂は略開す

線を見ることあり然れども妊娠線は妊娠したることなき婦人に於ても見ることあるは既に前に述たる如くなれば注意すべし子宮底は經産婦にては腹壁の弛緩せるが爲に初妊婦よりも前方に傾き其位置低きを通常とす

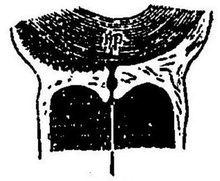
第六十八圖



初妊婦に於て子宮腟部の猶存せる圖

即ち妊娠第五六箇月の頃なり

第六十九圖



初妊婦に於て子宮腟部漸次短縮せる圖

即ち妊娠第八九箇月の頃なり

第七十圖

初妊婦に於て子宮腟部全く消失せる圖

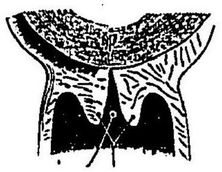
即ち妊娠第十箇月の頃なり

初妊婦の外陰部に於ては處女膜猶輪狀にして陰唇繫帶又は腟口等に裂傷の瘢痕を認むることなし經産婦にては處女膜は概ね小片に裂け且つ陰唇繫帶、腟口等に裂傷の瘢痕を見る

か或は甚だしく弛緩す

腟は初妊婦に於ては多くは横に並べる皺襞ありて前後壁相接するも經産婦に於ては廣濶にして皺襞少きか或は全くなくして滑澤なり

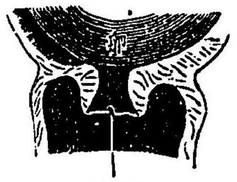
第七十一圖



經産婦に於て子宮外口の既に開ける圖

妊娠第五六箇月の頃なり

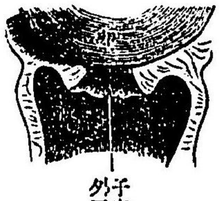
第七十二圖



經産婦に於て子宮内口の既に開き且つ腟部の少くし短縮せる圖

妊娠第八九箇月の頃なり

第七十三圖



經産婦に於て妊娠第十箇月に至り子宮腟部の猶少くし存せるを示する

最も大切なるものは子宮腟部及び子宮口の變化にして初妊婦に在りては子宮腟部の硬さは一樣にして表面には凸凹を見ることなく次第に其尖端より柔軟となり妊娠第六箇月の

頃より漸次に短縮し妊娠末期に至れば全く消失し其子宮口の邊緣は薄くして鋭し然れども通常子宮外口は分娩始まるまで開くことなし經産婦に在りては子宮膣部は硬軟一樣ならずして其表面不正に凸凹あり妊娠第八九箇月の頃に至りては多少短縮するも初妊婦の如く著しからずして分娩始まりて後に消失す然れども子宮外口は妊娠後半期に至れば既に漏斗狀にして指頭を挿入し得べく其邊緣は厚くして不正なり

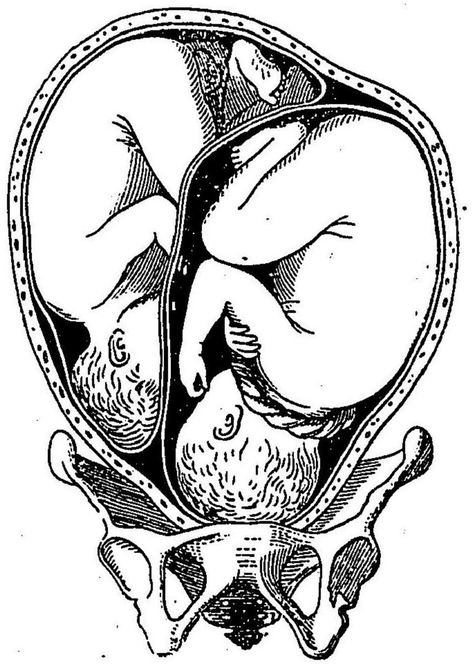
此等の徵候に注意すれば初妊婦と經産婦との區別をなし得べきも以前の妊娠は終末にまで至らずして流産、早産等をなせるときは其變化も亦妊娠經過の長短により多少あり又前回の分娩より年を經ること久しければ其變化不明となることあり又腹部の腫瘤或は腹水等に因りて腹壁の弛緩、妊娠線等を殘すことあり又分娩に因らざるも疾病、外傷又は手術の爲に外陰部、膣壁、子宮膣部等に瘢痕其他の變化を殘すことあれば此等の點に注意して診斷を誤らざることを要す

第七十八節　複胎妊娠の診斷

複胎妊娠のときは腹部の膨大割合に甚だしきこと同じき胎兒の部分を多く觸知することは單胎にはあり得べからざる多數の小部分を觸知することは異る速の胎兒心音を異なる場所に於て明かに聽取し其聽取する場所の中間に心音の全く聽へざる部分又は微かに聽ゆる部分あることなりとす

固より單に心音のみに依りて判斷するときは誤りに陷り易ければ胎兒部分の多く觸知し得ることをも認めざるべからず而して複胎妊娠は羊水過多なるとき又は鬼胎妊娠のとき又は腹腔内の腫瘤と單胎妊娠と共に存するとき等には區別し難きことあり殊に複胎妊娠には羊水過多を兼ぬることありて診斷の困難なることあり

第七十四圖



雙胎妊娠にして雙兒共に頭位を取れるものなり

第七十九節　妊婦の攝生法

既に前に述べたる如く妊娠は疾病にあらざるが故に其間の攝生法も亦平素の攝生法と異なることなし然れども婦人體内には急劇に大なる變化を來すものなれば平常に比すれば僅かなる不攝生も諸種の疾病を誘起すの基となり易きが故に一層の注意を要す

飲食物は平素の嗜好に從ひて之を用ゐしむべし其量の如きも強て增減するに及ばず然れども成るべく消化し易く、風氣を釀すことなき食物を用ゐ、香料(芥子、胡椒、唐椒の如し)、酸味強きもの、強烈なる酒類、多量の濃厚なる茶、咖啡の如きは之を避くるを宜しとす妊娠中嗜好に變化を起し香料を多量に用ゐ爲

に流産を來したるものあり

妊娠中は殊に大便の通利を注意すべし毎朝惡心、吐逆あるが如き塲合に於ては特に然こす便秘の傾あらば適宜の運動をなし又は毎朝清水を飲み或は淡薄にして風氣を釀すこなき少量の野菜、果物等に由りて毎日一二行の通利を得るを宜しとす若し其等の方法効なくば「グリスリン」又は石鹼水の浣腸を試むべし然ども反覆之を行はずして成るべく習慣を得て毎日上厠するに至らしむることを務むべし若し浣腸を行ひて効なければ醫師の指圖に從ふべし又下痢あるときは食物に注意し不消化なるものを避くべし尿意あらば其度に排尿すべし長く之を忍ぶは害ありこす

妊婦の適宜なる運動は便通を能くするのみならず健康上甚

だ大切なることなれば通常の家事を處置する外各自に適宜なる程屋外に出で成るべく清爽なる土地に散歩すべし又屋外の散歩は只に身體の運動のみならず新鮮なる大氣を呼吸する爲に甚だ有益なり屋外にても多人數集會したる塲所などに長座することは甚だ宜しからず

異常なき妊婦長く屋内にありて坐業をなし或は臥す等のことは却て害あり殊に本邦婦人の裁縫に從事すること長時間に渉るが如きは最も忌むべきことなり其他長途又は惡道を人力車又は馬車に乘り或は長時間滊車に乘り或は乘馬、奔馳、飛超、其他重きものを提げ或は扛げ或は荷ひ或は高所にあるものを取り下し或は高所に物をあげんとして力を用ゐ、重き抽斗を開閉するが如きこと屢階段の昇降

をなすが如きこと其外洗濯、張物等總て甚だしき身體の運動は害ありとす殊に努責を要するが如きことを避くるを宜しとす故に平生の狀態に應じて適度の運動を行ひ決して輕卒なることなき樣に勉むべし

世人妊娠經過中長途旅行などをなすに或は後半期を以て安全なりとし或は前半期を以て安全なりとするも實際其危險は同一なり又前回の妊娠中長途の旅行をなし安全なりし故次回にも亦之を試みんとするものあり斯る場合にも必ず前回を以て標準となすことを得ざるものなり

妊娠中に於て下腹に痛を覺ゆるか又は時々緊張の感あるか又は胎兒下降せるが如き感あらば運動を少くし成るべく安靜を守らしむべし殊に妊娠末期に至りては斯の如き感を來す

こと多きものなれば注意を與ふべし

其他妊娠中に於ける交接は最も注意すべきものなり殊に妊娠末期に至りては之を禁ずべきものなり若し分娩に先つ數日前まで之を行ふ時は產褥熱を起すの恐なしと云ひ難し

過劇なる運動の妊婦に害あるが如く過度に精神を勞することも亦害ありとす故に妊娠中は睡眠を充分ならしめ無益に精神を用うることなからしめ喜悲の情を劇しからしむる如きことは之を避べし又妊娠中に分娩に對して其困難を思ひ或は畸形兒などを生むことなきやなどの無益なる心配をなすもの多ければ斯る場合には務めて之を慰諭すべきは勿論難產其他不幸なる分娩に關しては決して談話すべからず稗史、小說を讀み演劇、音樂を見聞くが如きも感情を

動かすこと大なるのみならず長時間雜鬧の内に在り或は端坐するものなれば其害少なからず

衣服は成るべく寛濶にして時候に應じて充分温保の目的を達するを以て足れりとす叨りに衣を襲ねて煩しきに至り爲に身體の運動を妨げ或は強く緊りて胸部、腹部等を壓迫するが如きことは宜しからず幅廣き重き帶などを用うるは害ありこと殊に之を強く緊むることは宜しからず

腹帶は懸垂腹となれる妊婦には必要なれども正規の妊娠に於ては之を用うるの必要を見ざれども温保の目的と胎兒の**位置**を保つ目的とには全く無効なりと云ふことを得ず、されば舊慣を守りて所謂**結肌帶**をなすも可なり斯かる場合には廣き布片を用ゐ緩やかに之を纏ふを宜しとす之に依りて胎

兒の發育を妨げ分娩を容易ならしむと云ふが如き俗說に從ひ緊縛を加ふることは決して之をなすべからず却て害を來すことあり

又近頃本邦にて屢用ゐらるゝ莫大小製の婦人用半股引、或は洋服の下衣に用うるペテーコートの如きは平常の用にも甚だ可なり殊に妊娠中温保の目的には適當なるものなり

浴湯は通常の全身浴は毎日一度位之を用うることは害なきも長時間を費すことゝ、浴後感冒せざることゝに注意すべし然れども他の温泉浴、海水浴、坐浴等は醫師の指圖を受くるにあらざれば之を行ふべからず

妊娠末期に至り粘液の分泌著しきときは一日數回微温湯を以て外陰部を洗ふべし若し其分泌物甚だ多量なるときは腟

の洗滌を要することあれば醫師の指圖を受くべし

乳房は分娩後授乳の必要あるものなれば既に妊娠中に注意して不潔物などの乳頭に附着せるときは屢石鹼と微温湯とを用ゐて清潔にし損傷あるものは醫師の指圖を受けて之を處置し皮膚の薄弱にして損傷し易きものは冷水又は酒精等を用ゐて屢之を洗ひて損傷を來さゞることを謀るべし若し乳嘴突出せずして扁平なるか或は陷凹せるときは分娩までに日々之を引出し哺乳に適せしめざるべからず通常は清潔なる指頭を以て屢之を引き出し且つ揉むを宜しとす或は吸乳器を用ゐ或は吸角を用ゐて引出すことあり

總て娠娠中俗間に行はるゝ妄說を信じ爲めに危害を來すことなきにあらざれば產婆は宜しく之を妊婦に諭し無

稽の妄信に因りて百年の生命を害するなからんことを務めざるべからず若し處置の明かならざるものは之を醫師に諮り輕卒粗漏の事なきを期すべし

正規分娩の經過及產婦の取扱法

第八十節　分娩の種類

分娩(出產、娩產、產)とは卵子が一定の產道を經て母體より排出せらるゝを云ふ即ち陣痛の開始より後產の娩出を終るまでを云ふなり此作用は多くは天然力によりて平易に終るものにして之を自然產と云ふ然れども又往々異常を生ずることありて爲に醫師の力を藉りて分娩を終らしむる必要を生ずることあり之を人工產と云ふ

分娩は其異常の有無に由りて正規分娩及異常分娩の二つに分ることを得

正規分娩とは妊娠四十週の後に起り其作用は單に自然の力のみにより母子共に危害を受くることなく胎兒は生命を完くして生るゝものを云ひ然らざるものを異常分娩と云ふ分娩は其起る時期によりて流產、早產、定期產及び晩產の四つに分たる

(一)流產(又は不熟產)とは妊娠第二十八週以前に分娩するものを云ふ其分娩せる初生兒は未熟嬰兒なり

(二)早產とは妊娠第二十八週乃至第三十八週に於て分娩するものを云ふ此時期に於ける初生兒は早熟嬰兒なり

(三)定期產とは妊娠第三十八週乃至第四十週に於て分娩するものを云ふ即ち成熟せる初生兒を得べし

(四)晩產とは妊娠の經過平常よりも長く四十週を超えて後分娩するものを云ひ其生兒は過熟嬰兒なり

妊娠第二十八週以前に生れたる胎兒は生後全く生活を保ち得ざるを常とするものなり然れども近時學術の進歩と共に充分なる養育に由りて極めて稀に生命を全くするものあるに至れり

妊娠第二十八週乃至第三十八週に於て生れたるものは細心注意して看護せば生命を保持せしむることを得べし定期產にて生れたる成熟嬰兒にても不注意なる保育をなせば生命に危險を來すことあり

又分娩せる胎兒一なれば單產と云ひ二以上なれば複產と云ふ

第八十一節　娩出力

胎兒は陣痛及腹壓によりて母體より排出せらる此の陣痛と腹壓とを娩出力と云ふ

陣痛とは疼痛を伴ふ處の子宮の收縮にして之れに由りて分娩は開始し、經過し、終局するものなり陣痛は次に述ぶる處の特性を有し容易に他の疼痛と區別し得るものなり即ち

陣痛は續きて痛むものにあらずして發作性に起るもの即ち痛ある時と痛なき時と交代し其疼痛は起り始る時には輕くして漸次に强烈となり極度に達すれば暫時持續して後漸次に弱くなり終に全く消失す此疼痛ある時期を陣痛發作時と云ひ疼痛なき時期を陣痛間歇時と云ふ

陣痛は初め薦骨部に起り腹部に廻り延きて臍部及鼠蹊部に及ぶ而して陣痛甚だしく强烈となる時には其痛は上腿及び下腿に向て放散するものなり

陣痛發作の間は子宮は固くなりて腹壁に近づき明に前方に突隆す陣痛は前述の如く子宮の收縮によりて起るものなれば陣痛の間子宮の固くなる理由も自ら明なるべし之れ子宮は筋組織より成るもの成れば他の筋肉と等しく收縮の際に固くなるものなり

陣痛は分娩を開始し之を催進するものなり

產婆は疼痛を伴ふ子宮の收縮を何れも皆分娩を催進する陣痛なりと速斷ずべからず即ち殊に初產のものに有りては妊娠の末期に於て子宮に收縮起り疼痛を伴ひ其疼痛は時として隨分强烈にして眞の陣痛に類することあるも前に述べた

る陣痛の徴候を缺くのみならず此疼痛に由りて分娩の進むことなし之を前驅陣痛又は豫備陣痛と云ひ稀に之に引續きて眞の陣痛の起ることなきにあらざるも大概は數時間持續したる後に消失す、かゝる狀態は時として反覆して來ることありと雖も妊娠は依然として持續すされば之によりて數日の後に眞の陣痛の起るべきことを豫期し得べし故に産婆は妊婦に疼痛を件ふ子宮の收縮を認むるとも今將に分娩せんとする諸徴候を明に具ふるにあらざれば輕々しく之を陣痛なりとし分娩開始せりと斷言すべからず

而して陣痛即ち子宮の收縮は産婦の意志に隨ふことなく全く

不隨意に起るものなり

又腹壓は腹壁の皮膚の下に在る筋肉緊張するに由りて生ずる

ものなり殊に分娩の末期に於て陣痛を助けて娩出を促すものなり此腹壓は産婦の意志に由りて加減し得るものなれども胎兒娩出の直前には殆ど不隨意に起りて強く努責するに至るものなり近來の説によれば胎兒を娩出する作用の大部分は腹壓に基くものにして陣痛は却て之を助けて主ことして娩出の際に於ける子宮の位置及胎兒の位置を正ふするものなりと云ふものあり

第八十二節　分娩經過の時期

分娩とは陣痛開始より後産の娩出を終るに至るまでの間を云ふこと既に述たるが如し今之を次の三期に區別す

第一期は即ち開口期

第二期即ち娩出期

第三期即ち後産期(娩隨期)

第一期は陣痛の開始を以て始まり子宮口の全く開大するを以て終る

第二期は子宮口の全開大を以て始まり胎兒の娩出を以て終る

第三期は胎兒の娩出より後産の娩出を終るまでを云ふ

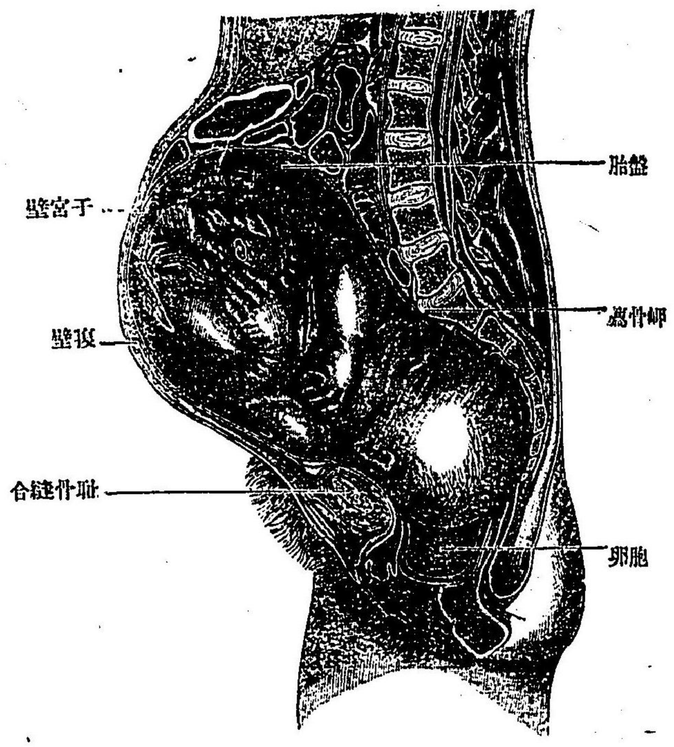
第八十三節　正規分娩の經過

子宮は筋肉組織より成る嚢にして妊娠の時には其中に卵子を以て充さるゝが故に其收縮始まる時は卵子は直に壓迫を蒙むる、されど子宮の收縮は一樣に起るものにあらずして子宮の上部即ち子宮底及子宮體に相當する處は筋肉組織に富む

を以て收縮力最も強く之に反して子宮の下部及び頸部は構造薄弱鬆粗にして收縮力亦弱し

斯く收縮力に不同あるが爲に一方には薄弱なる子宮下部緊張し隨ひて子宮內口開き子宮下部は酒杯狀に開張し其部分の卵膜は剝離し始め

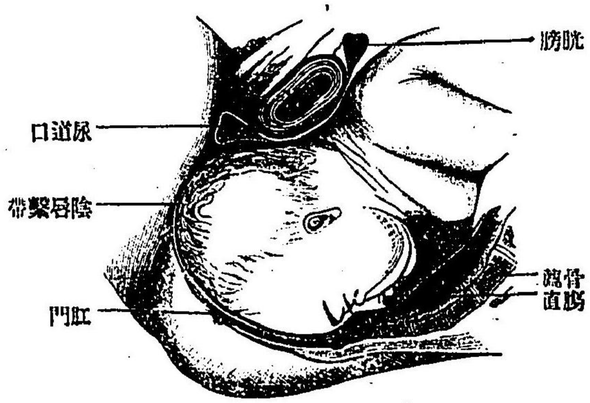
第七十五圖



卵胞に依りて子宮口の開大せらるゝ狀態を示す

一方には子宮底及子宮體の強き收縮によりて卵子は下方に向て壓迫せらる卵子壓迫せらるゝ時は羊水は壓力弱き子宮下部に相當する卵膜の下部に押しやらるゝが故に陣痛の續く間剝離せられたる卵膜の下部は緊張し楔狀に子宮口内に鋏入し胞狀となりて子宮口を開大す此の胞狀に突隆せる卵膜の部分を卵胞又は胎胞と云ふ故に分娩の始れることを確かに定めんとするには子宮口の開大を始めたること、卵膜の剝離して卵胞を形成したること

第七十六圖



兒頭の排臨せる時側面より見たる狀を斷面にて示す

とを認むるを要す而して卵胞は陣痛間歇時に弛緩し陣痛發作時にのみ緊張するものにて陣痛次第に強烈となるに從ひて以前よりも強く緊張して漸次子宮口を開大す而して終に陣痛間歇時にも弛緩することなくして緊張したるまゝに止まり子宮口は開大せられて其邊緣は互に相觸るゝことなく極めて韮薄となり增々開大せらる通常之に次で陣痛發作の時に於て卵胞破裂し羊水の一部即ち前漏水又は前水を漏す之を卵胞破裂又は破水と云ふ其時期は子宮の少くも直徑六仙迷以上に開大したる後なるを常とす而して子宮口漸次に開大して全く其邊緣を認むることなきに至れば子宮口は全く開大せるなり子宮口の全く開大せるときは其直徑大凡十一乃至十二仙迷あり

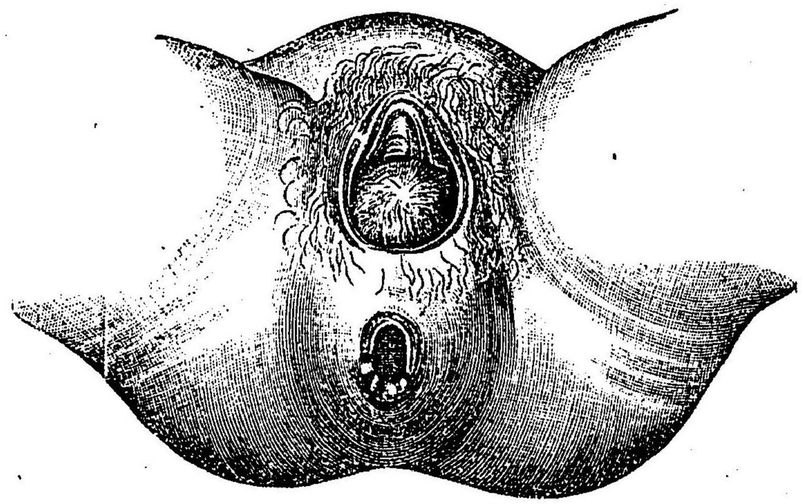
第七十七圖

兒の露る側より見るを面とす
頭撥せ時面りたり狀斷に示

若し卵胞早く破裂する時は陣痛は強くなるも子宮口の開大は徐々なり故に自然に破水した る場合の外は子宮口の全く開大するまでは成るべく卵胞の破裂せざる樣注意するを宜しとす

又破水に際し屢明に一種の雜音を聽取し得ることあり産婦は此感覺より體内に於て何物か破裂せしにはあらずやと懸念することあるものなれば産婆は臨産婦に對して前以て此事

第七十八圖



兒頭の撥露せる時外陰部の方より見たる狀を示す

を心得させ置くべし

陣痛に由りて子宮口充分に開大し卵胞は破裂して羊水漏出するや胎兒の下向部(又は前置部)は增々下降し陣痛は益々强くなり陰部より帶紅色の粘腋を漏出することあり之れ分娩の愈始まれるを示すものなり之より陣痛相次ぎて至り發作は强く且長くなり間歇は短縮し胎兒下向部は愈降下して終に骨盤下口に達し會陰部は膨隆

し兒頭は陰唇の間に顯はれ疼痛は其極度に達す又陣痛間歇時にも兒頭は軟部を壓挫するが爲に疼痛を感じ産婦は顏面潮紅、心身不安、全身に汗を流し努責して強く腹壓を加へ恰も秘結せる便を排泄せんとするが如く上腿又は腓腸に痙攣等を發するに至ることあり而して陣痛の際に下降せる兒頭は間歇時には再び退き只其一小部分を陰唇の間に現はす此の如き時期を兒頭排臨すと云ふ此時期に於ては會陰部は甚だしく緊張せられ肛門飜轉して不隨意に便を洩すことあり而して終に兒頭の大部は陰唇の間に露出し來り間歇時と雖ども再び退くことなくして次第に娩出するに至る此時期を兒頭撥露すと云ふかくの如くして最後の陣痛に由りて兒頭娩出す兒體を排出するには之に次ぎて起る二三回の陣痛に

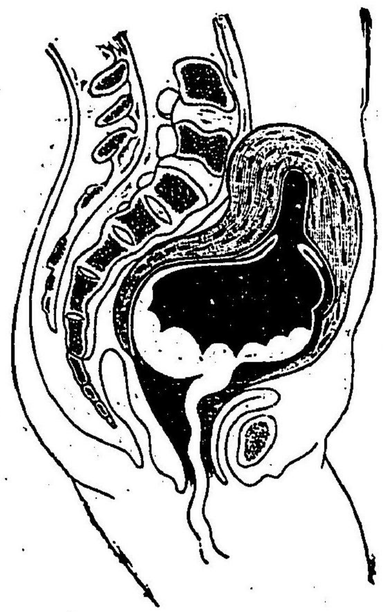
て足れり

陣痛は分娩の初期には子宮口の開大を促すものにして初めは十分乃至十五分の間歇を以て十五秒乃至三十秒の發作持續し漸次强烈となり四五分時に反復するに至る之を開口期陣痛と云ふ末期には娩出を促し其間歇は漸次に減じ發作は次第に長く且つ强くなる之を娩出期陣痛と云ふ而して兒頭排臨する頃より後は疼痛殊に甚だしく且つ頻繁反復し時として陣痛時に大聲叫泣し全身震顫するに至ることあり之を戰慄陣痛又は震顫陣痛と云ふ

分娩後は産婦は著しく輕快を覺へ陣痛は暫く止み猶子宮内に殘りたる羊水即ち後水は兒體の娩出と共に流出す次に再び陣痛起り後産又は娩隨(胎盤、卵膜及臍帶)の娩出を促がす

此陣痛は所謂後産期陣痛にして以前の陣痛よりも弱し胎兒分娩する後子宮收縮すれば胎盤は子宮より剝離し始め胎盤の附着面は縮小し其一部は子宮腔内に脱落し子宮と胎盤との間の空隙に多少の出血あり次て起る處の陣痛に際して胎盤は增子宮より剝離し子宮腔内に降下し終に卵膜と共に下りて子宮の下部或は膣に達し其母體面は卵膜にて包まれ平滑なる胎兒面を陰唇の間に表はし自然に娩出するか或は輕き腹壓により或は手を以て子宮底を輕

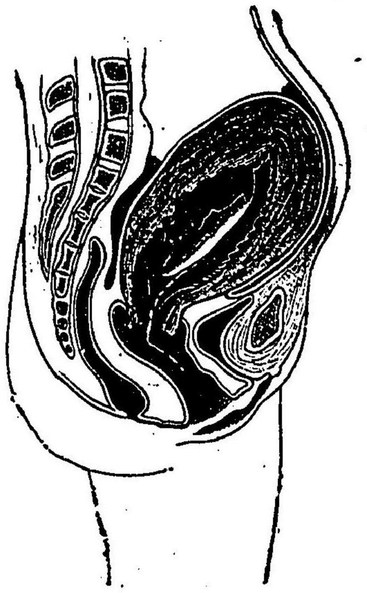
第七十九圖



胎盤の胎兒面を露出して娩出する狀を示す

く按腹すれば容易に排出せらる(第七十九圖)然れども往々胎盤は飜轉することなくして降下し母體面を以て陰唇の間に露出することあり(第八十圖)而して後産の娩出によりて分娩は全く其終を告ぐるものとす

第八十圖



胎盤の母體面を露して娩出する狀を示す

此際子宮は收縮して其底部は殆ど臍窩の高さに達するを常とす而して陰部よりは尙少量の血液を漏らす

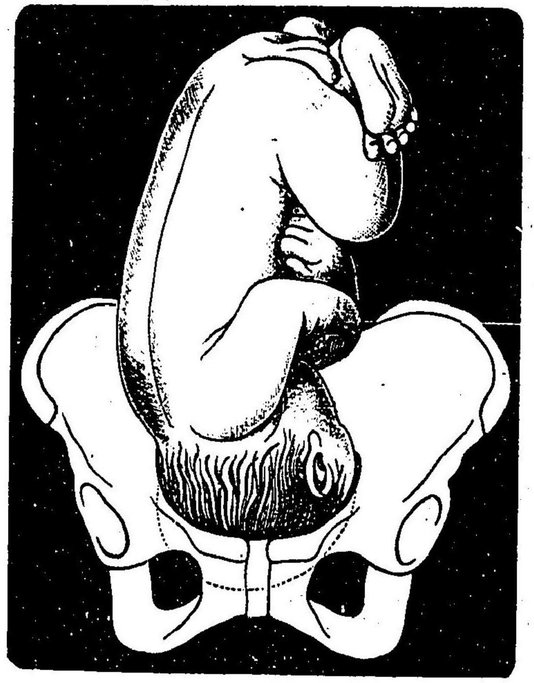
分娩は單に陣痛のみに由りて遂げ得べきものにあらず勿論娩出の主力は陣痛に在りと雖ども之を助くるものは腹壓なり

(第八十一節を參照せよ)殊に分娩の第二期及び第三期に於て然りとなす腹壓は子宮の上に壓を及ぼして既に開口したる子宮の中にある胎兒の陣痛に由りて排出せらるゝことを容易ならしむ然れども子宮口の開大せざる間は腹壓は分娩に効なし且分娩の第二期の終に於て兒頭娩出せんするとき腹壓極めて强烈なるときは兒頭の排出速に過ぎ爲に裂傷を生ずるの恐あり故に分娩第一期中及第二期の終には產婦に腹壓を禁ずべし

第八十四節　分娩時に於ける胎兒の位置

自然產は縱位にて經過するを通常とす故に胎兒の頭部又は骨盤端部は下方に向ふなり之によりて縱位を

第八十一圖



頭位の圖

頭位と骨盤端位

この二に分つ頭位は分娩の大多數は之によるものにして更に體勢に由りて頭部は胸部に近づきて(即ち普通の體勢)後頭部の最も下方に向ふもの(即ち後頭部の先進せるもの)を後頭位と云ひ頭位分娩中の多數はこれによる又胎

兒の頭部の少しく後方に傾き頤部少しく胸より離るゝもの即ち分娩に際しては前頭部の最も先進せるものを前頭位と云ふ又頭部の甚しく後方に傾き頤部は胸部より甚しく遠かり後頭部は項部に接するが如くして分娩に際しては顔面の最も先進するものを顔面位と云ふ若し頤部が胸部を離るゝこと顔面位より少なく前頭位よりも大なる時

第八十二圖

骨盤端位の圖

は前額部先進す之を前額位と云ふ

骨盤端位に於ては尾骶部最も下向し兩足は尾骶部に近く位せずして內診に際し觸知し得ざるものを尾骶位と云ふ足の尾骶部よりも先に下向するものを足位と云ひ膝の尾骶部よりも先きに下向するものを膝位と云ふ

此等の體位及體勢を取りたる胎兒の骨盤を通過するに際し其背部が母體の左右何れかの方に向ふことによりて體向を分つ即ち前に述べたる如く胎兒の背部母體の左方に向ふときは第一體向と云ひ背部右方に向ふときは第二體向と云ふ

例令ば後頭位に於て胎兒の背部母體の左側に向ふ時は之を後頭位の第一體向又は單に第一後頭位と云ひ顔面位に於ても兒背の左側に向ふときは顔面位の第一體向又は第一顔

面位と云ふが如し其他は推して知るべし

又兒背の左方又は右方に向ふと共に多少前方又は後方に向ふにより て各體向に於て背の前方に向ふものを第一分類と云ひ後方に向ふものを第二分類と云ふ

胎兒の位置殊に頭位の區別には多くの産科學者種々の名稱を用ゆるが故に讀む所の書籍に從ひて多少の差異あるべし故に今左に其比較をなして了解に便にせんとす

第一後頭位は第一後頭蓋位又第一頭蓋位と云ひ

第二後頭位は第二後頭位又第二頭蓋位と云ひ

第一前頭位は第一前顱位又第四頭蓋位と云ひ

第二前頭位は第二前顱位又第三頭蓋位と云ふ

顔面位は混雜を來すことなし

縱位の外に横位或は斜位と名くるものありて自然の娩産を遂げ難きものあれども後編分娩異常を説くに當りて詳かに之を述ぶべし

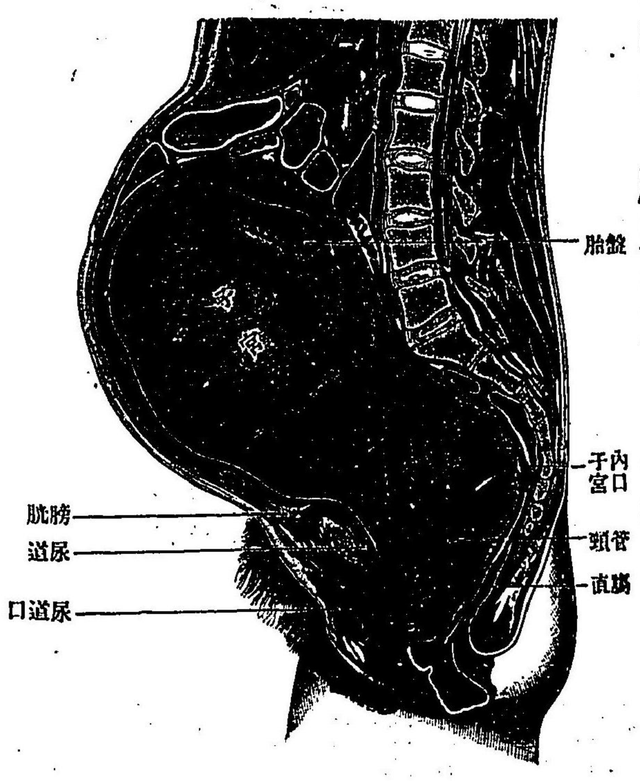
上に述ぶる處の位置の内後頭位は最も胎兒に危害少き位置にして百回の分娩中大凡九十五回は此位置を以て生る其中第一體向を取るもの二回に對し第二體向を取るもの一回位の割なり其他骨盤端位は百回の分娩中四五回に過ぎず顔面位の如きは極めて稀に見る處のものなり

故に先づ後頭位の分娩の經過を説き充分之を理解するは最も必要なりとす

第八十五節　第一後頭位に於ける兒頭の產道經過の方法即ち分娩機轉

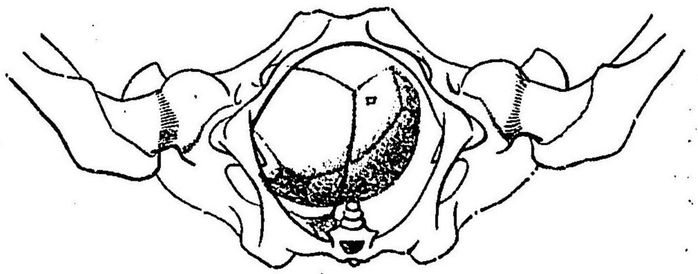
產道は硬部と軟部とより成る硬部產道とは骨盤管にして或は之を骨產道とも云ふ軟部產道とは之を被ふものにて子宮頸、膣、外陰部を云ふ而して此產道若し單一なる圓壔狀の管ならば兒頭の壓出さるゝにも複雜なる關係を生ずることなかるべし然れども產道は彎曲し且各部分其形を異にするが故に兒頭は產道を通過するに際し若干の廻轉を爲さゞるべからず其狀態は今より順を逐ひて之を述ぶべし通常頭部は頭位分娩に際し最初に出る處にして兒頭の產道を通過するに最も都合よき狀態は胎兒が正しき體勢を取るときにあり胎兒の正しき體勢とは前に述たるが如くにして殊に其內にても其頤部を胸に近づけたるときなりとす分娩の初めに於て兒頭は骨盤上口の上に在り或は既に一部は骨盤腔內に到りて後頭は第一體向に於ては左方に向ひ前頭は右方に向ふ即ち小顱門は左方にありて大顱

第八十三圖



產道の縱斷したる處を示す

第八十四圖



第一後頭位に於ける分娩を下方より見たる想像圖

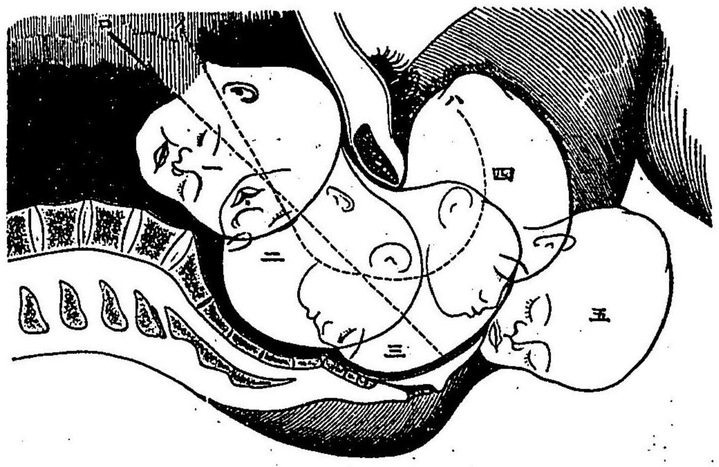
(イ)は小顏門にして兒頭恰も骨盤濶に進まんとするときの兒頭と骨盤の關係を示す

(ロ)も亦小顏門にして兒頭漸く下降して骨盤濶を去らんとする時の有樣を示す

門は右方にあり矢狀縫合は左より右に骨盤上口の横徑線の方向に走る

凡て後頭位に於ては兒頭の位置を其矢狀縫合と骨盤の諸徑線との關係にて表はす故に例令ば兒頭が横徑線上に在りと云ふは矢狀縫合が横徑線の方向に走ることにして矢狀縫合が斜徑線の方向に走る時には兒頭が斜徑線上に在

第八十五圖



第一後頭位に於て兒頭の產道內を通過する有樣を縱斷面にて示す圖

(イハ)は骨盤軸の方向

(ロ)を以て示したる矢の方向は陣痛と腹壓と共に作用して兒頭を下方に壓し出す方向を示す

一、二、三、四、五の數字は兒頭の漸次に下降し娩出する順序を示す

りと云ふ

最初の陣痛によりて後頭部は下方に壓せられ頤部は著しく胸部に接す故に小顏門は大顏門よりも下方に在りて最も先進するに至る之を第一の廻轉といふ猶引續きて起る陣痛によりて兒頭は骨盤內に

進み之れと同時に廻轉をなし小顖門の在る處の後頭は前方に大顖門の在る處の前頭は後方に向ふ即ち第一後頭位にありては後頭は左側の閉鎖孔の近傍に前頭は右側の薦腸關節の近傍に在り矢狀縫合は左前方より右後方に走り右斜徑線(即ち第一斜徑線)の上に在り此の狀態は概ね兒頭恰かも骨盤濶を通過するときに認め得るものなり

兒頭骨盤峽に入れば陣痛の發作する毎に小顖門は漸次に前方に向ひ大顖門は後方に向ふ

猶頻りに反復する陣痛の働きによりて兒頭は骨盤下口に壓排せられ其際後頭は更に前方に廻轉し恰も耻骨縫合の後方に前頭は薦骨の陷凹せる部分にあり矢狀縫合は前方より後方に走る即ち左方にありし後頭が前方に回り、右方に在り

し前頭が後方に廻るを第二の廻轉と云ふ陣痛尚働きて兒頭を會陰部に壓迫し會陰は陣痛毎に膨隆し且伸長せらる此際既に兒頭は陰唇の間より見得べし次で陰唇の間より表はれ陣痛毎に露出す(兒頭の排臨及撥露の時期)後頭全く露出すれば項部は耻骨縫合の後緣に小顖門の部は耻骨縫合の下緣に止まり次の陣痛の働により兒頭は更に廻轉を始めて頤部は胸部より次第に離れ陣痛の加はるに從ひて兒頭は大部分陰唇の外に表はれ會陰は緊張し、光澤を有し著しく伸長し肛門開き其前壁隆起して現はるゝに至る

顱頂及前額が陰唇の外に出れば今まで甚だしく緊張したる會陰部は胎兒の顏面の上を滑り戻りて兒頭娩出せらる之を以て兒頭は第三の廻轉を終り更に其顏面は母體の右の上腿

の内側に向ふ此廻轉を第四の廻轉と稱ふるなり而して其の間に肩部は骨盤内に來り其横徑即ち肩幅は左斜徑線(即ち第二斜徑線)上に在り右肩は右耻骨枝の近傍に左肩は左側薦腸關節の近傍に在り而して漸次に陣痛に由りて右肩は前方に左肩は後方に廻り骨盤下口に來りたる時には右肩は全く前方に左肩は全く後方にあり

肩の位置を示すには肩幅即ち兩肩を結合する直線によりてすれば若し此線が骨盤の直徑線上に在るときは肩は直徑線上に在りと云ふなり故に此位置即ち第一後頭位に於ける分娩にては兒頭娩出の後には肩は骨盤下口の直徑線上に在り右肩は耻骨縫合の後に左肩は會陰部に在り陣痛によりて前方に在る右肩の一部陰唇の内に現はれ耻骨弓下に突張し後方に在る左肩は徐に會陰を超えて出づ既に肩部出れば他の軀幹は容易に娩出するものなり

以上は後頭位の第一體向に於ける分娩の經過を示したるものなれども胎兒が第二體向を取れる時にも兒頭の骨盤内通過の狀態は第一胎向に於ける時と同じく只左右の關係を異にするのみなり故に兒頭の矢狀縫合は骨盤上口に於ては骨盤の横徑線上に在りて後頭は右方に前額は左方に向ふ骨盤腔内に於ては兒頭は左斜徑線(即ち第二斜徑線)上に在り後頭は右側閉鎖孔の近傍に前額は左側薦腸關節の傍に在り骨盤下口に於ては兒頭は直徑線上に在りて後頭は耻骨縫合の下に前額は薦骨尾骶骨關節の近傍に在り兒頭の娩出したる後顔面は母體の左上腿の内側に向て廻轉す肩は骨盤腔内に

於ては右斜徑線即ち(第一斜徑線)上に在り骨盤を去るに臨みては骨盤直徑線上に在りて左肩は耻骨縫合の下に右肩は會陰部に在りとす

第八十六節　産婦の診察法

産婆は分娩の經過に異常なきや否やと分娩の經過が何れの邊まで進めるかを察し産床に侍して如何なることをなすべきかを定めざるべからず故に先づ精密なる診察をなし之によりて豫め其分娩に對する總ての準備と介助の順序とを考ふべし

此診察は内診及外診の二に分たれ其方法は妊婦の診察法と大差なきものなり(第七十一節より第七十四節までを參照せよ)

一尋問　婦人既に産に臨める時は先づ第一に陣痛の何時始まれるや陣痛には規則正しき間歇時を伴ふや否や又更に陰部より液體漏出せしや否や即ち既に破水せるや否やを問ひ若しこれあらば何時なりしかを尋ぬべし然れども若し兒體の娩出には猶多くの時間を要すべしと考へらるゝが如き場合にて初度の診察をなすものなれば妊婦診察法の示すが如き既往の經歷に就て尋問をなすべし

二外診　産婆は只陣痛間歇時に於てのみ外診を行ふべし陣痛時に診察をなせば必要なる關係に就ては何の得る處もなく却て無益に子宮を刺激し時としては危害を來すことあり其方法は妊婦に於ける診察の方法に同じ

三内診に先ち豫め手及陰部に嚴密なる消毒を行ふことを要す其方法は既に前に述べたる如し内診を行ふに際して注意すべきことは妊婦の内診に於けると同樣にして精細に外陰部を見、分泌物の多少又は潰瘍の有無を知りたる上、一方の手指を以て陰唇を開きたる後他側の手指を膣内に挿入し徐々に骨盤軸の方向に從ひ膣穹窿及子宮口の方へ進む若し婦人臨産せる時は子宮膣部の消失せるを見出すべし次になすべきことは子宮口の所在を求むることにして子宮口は何處に在りや前に在りや後に在りや其大さ何程なるやを見るなり子宮口の大さを定むるに一定の云ひ表しかたあり即ち一指を通ずべしとか二指を通ずべしとか或は二錢銅貨大なり或は手掌大なり或は何仙迷の直徑ありなどゝ云ひ

表し若し子宮口緣の觸知し得ざる時は子宮口全く開大せりと云ふ次に子宮口緣の狀態平滑なりや、將た鋸齒狀なりや、菲薄なりや、將た肥厚せるや柔軟なるや、將た硬靭なるや、緊張せるや、將た弛緩せるやを見るべし

吾人は子宮口の位置、大さ、狀態等を見たる後に卵膜の檢査に移るべし即ち子宮口に胎胞嵌在するや否や或は既に破裂して羊水漏出せるや否やを確むるなり大概の場合に於て此鑑識は容易なり殊に卵胞の前出部に多量の羊水ある時に於て然りとす陣痛間歇時には弛緩してこれに觸るれば空氣を秡きたる護謨球の如く之に由りて陣痛時に何程緊張するやを も略想像し得べく陣痛發作時には徐かに指頭を卵胞の一部に置くときは其緊張の度を知ることを得べし然れども羊水

極めて少量なる時には此判斷は困難なることあり此時には卵胞は胎兒の下向部と密接して存するが故に下向部の上に平滑なる皮膜緊張し居るにあらざるやを精細に觸診するを要するなり若し頭蓋先進し居れば觸診に際し破水後なれば直に頭髮を觸べし産婆は診察に際し指頭卵胞の處に達すれば之を損傷せざる樣注意すること肝要なり何となれば此不注意の爲に胎胞を破り正規分娩を變じて異常分娩となすの虞あればなり陣痛の際には卵胞は強く緊張し居り強力を用うるにあらざれば胎兒の先進部を明瞭に診察すること能はざるものなれば産婆は陣痛發作時には指を動かすことなくして陣痛の止むを待ち只陣痛間歇時に於てのみ診察すべきこと外診のときに同じ而して務めて徐かに

之を行ひ決して强力を用うべからず

次に産婆は診察に際し子宮口に限られたる部の胎兒先進部のみを觸知するに止むべし決して殘存せる子宮腟部又は子宮下部と胎胞との間に指頭を侵入せしむべからず何となれば之によりて容易に子宮口の損傷と産婦の疾病とを誘起することあればなり若し子宮口を通じて指觸し能はざる他の諸部分を觸知すべき必要ある時に腟穹窿の上よりすべし此部は分娩の時には其上より觸知するに適する程菲薄となるものなればなり是より吾人は下向部即ち先進部の診察に移るべし

頭部の先進し居ることは大なる硬き球狀物が子宮口の内に在ることを指頭に觸るゝを以て容易なり頭部は或は顱頂部を

以て或は顔面部を以て出で來る顱頂部先進せるものに在りては顱門及顱頂部の縫合を認め得べし故に縫合及び大小顱門を認むることは先進部の顱頂部なることを定むるには最も必要なるものなり顔面位に就きては後節に詳說すべし

既に顱頂部先進することを知れば猶次の諸問題を定めざるべからず即ち

一顱頂部は骨盤内の何れの徑線上に在りや

二其高さは如何即ち骨盤の何れの部分に在りや

顱頂部が骨盤の横徑、斜徑、直徑の三徑線の何れの上に在るやを定むるには矢狀縫合及び其經過を探らざるべからず何れの縫合も之に觸れ試むるに兩骨の相接するを觸るゝのみなれ

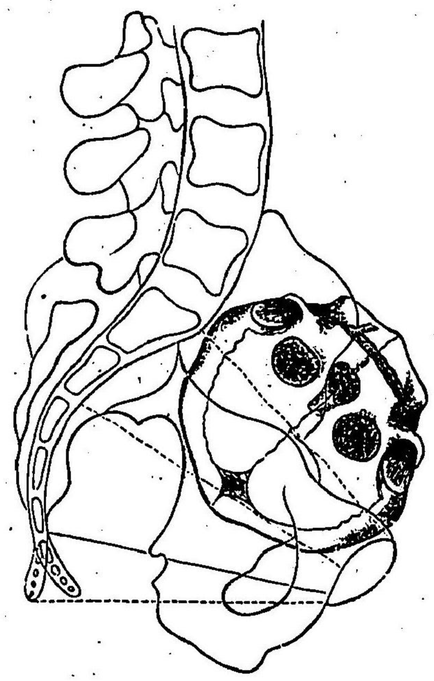
ばこれによりて矢狀縫合を定むることは甚だ困難なり故に先づ縫合を見出して其兩端を探り試むべし縫合の一端に類稜形の陷凹をなせる大顱門を觸れ他端に三個の骨の會合して成れる裂隙をなせる小顱門を觸るゝ時は此縫合は確に矢狀縫合なることを知るを得べし

一端に於て大顱門他端に於て鼻梁を觸知する時は是れ前額縫合なり一端に大顱門他端は耳部を觸知する時は是れ冠狀縫合なり一端は小顱門他端は耳の後面に達すれば是れ後頭縫合なり

既に矢狀縫合を見出せば又其方向を知り隨て亦兒頭の何れの徑線上に在るやを定め得べく且同時に顱門の所在に依りて兒頭の前頭及後頭の位置と兒背の位置とを知り得べし

次に兒頭の高さを定めざるべからず是れ分娩の何れの邊まで進みしかを知るに必要なるものなり而して兒頭が骨盤上口に在るや骨盤腔内に在るや將た骨盤下口に在るやを定めざるべからず既に前節妊婦の診察法を述ぶるに際し外診により兒頭の骨盤内に入れるや否やを定むるを得べきことを述べたり此診査を丁寧になし且熟練を積む時は之に由りて兒頭の高さをも推察し得べし然れども内診に由りては骨

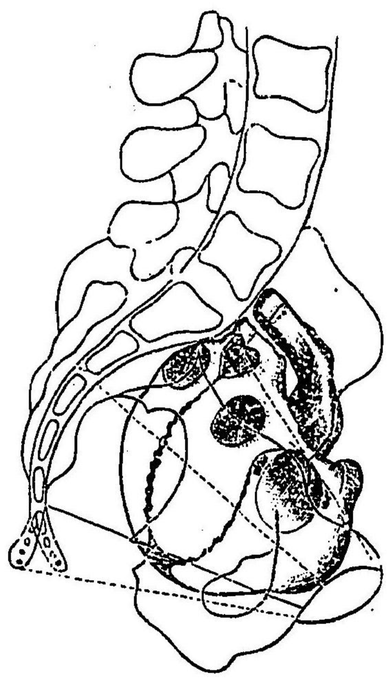
第八十六圖



兒頭骨盤上口に在る狀態を示す

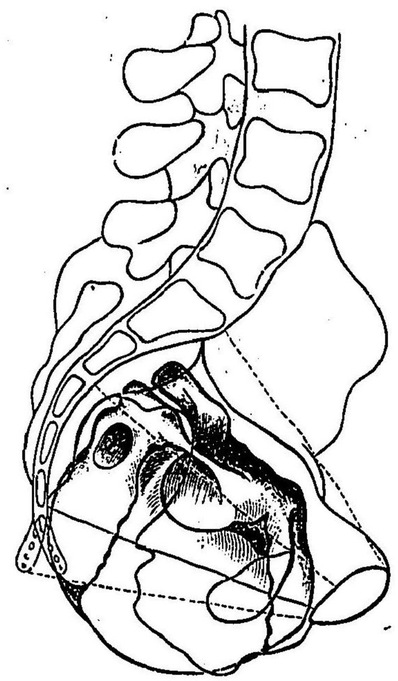
盤腔の部分との關係によりて兒頭の高さを定むるなり即ち内診して指頭直ちに薦骨岬に達するを得ば之れ兒頭尚骨盤上口の上に在るなり又指を兒頭の顱頂部に沿ひて彎曲しつゝ挿入する塲合にのみ薦骨岬に達し得れば之兒頭は骨盤上口に在るなり兒頭の下向部の爲に指の薦骨岬に達するを妨げられ只薦骨岬の下部に達し得るのみなれば兒頭は骨盤腔内に在り而して

第八十七圖



兒頭骨盤凹に在る狀態を示す

第八十八圖



兒頭骨盤峽に在る狀態を示す

此塲合にて兩側の坐骨棘を觸知し之を結合したる徑線の中に兒頭の先進部の一部弧形をなして觸るれば兒頭は骨盤濶に在りとす又兩側の坐骨棘恰も兒頭によりて觸るゝこと能はざるに至れば兒頭は骨盤峽に在りとなす若し頭部が既に骨盤下口に在るときは骨盤の前壁も後壁も觸知すること能はずして兒頭は既に陰裂の間に顯はる其他産瘤の存否及其大小と頭

蓋骨疊積の度合とを檢し之によりて分娩經過に困難多かりしや否やを考ふべし

兒頭に容易に達し得るや否やによりて其高さを定むるは誤りなり何となれば多くの塲合に於ては兒頭には容易に達し得るが如きも其位置は尙高きに在るものなればなり

急を要する塲合には産婆は前述の順序を守りて診察するの暇なきことあり即ち招かれて産婦の傍に至れる時は分娩は終りに近き會陰部膨隆し或は兒頭既に排臨或は撥露せること あればなり此際に産婆が悠々前述の尋問を始め次に外診に移るは愚の極と云ふべし故に産婆は其狀態に應じ速かに己れが手指及産婦の陰部を清潔にし而して尙暇あらば必要なる用意と處置とをなすべし又斯る塲合にても必要にして

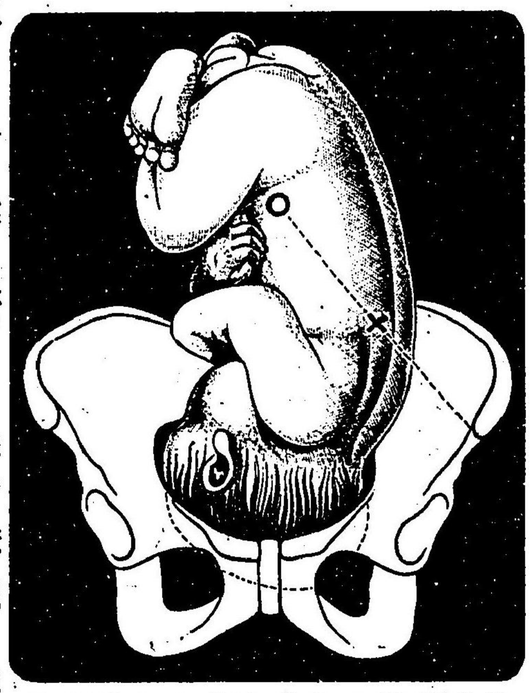
常に忘るべからざることは決して不潔なる手指を以て直接産婦に觸るべからざることなり若し手指を消毒するの遑なき時は消毒せる一片の綿又は布片を取出し之を手指に卷きつけて後會陰保護其他の處置をなすべきものなり

第八十七節　後頭位の診斷及其分娩經過

第一後頭位にありては外診の際兒頭を骨盤上口の上に觸れ胎兒の背面は母體の左方に向ひ子宮底に臀部あり母體の右側に其餘の小部分あり胎兒の心音は通常臍下左側に於て臍と左側腸骨前上棘との間に於て最も明に聽き得べし內診に當りては容易に小顱門を見出すべし是れ後頭部は最下方に位するによる小顱門は初めは左方にありて分娩更に進めば前

方に廻はり左側髖骨の閉鎖孔の近傍にあり終には猶前方に廻り左側耻骨下行枝の下に在り大顱門は初めは右方にありて分娩の進むに從ひて後方に廻はり左側薦腸關節の近傍に至り更に進みて後方に廻はり薦骨陷凹面に沿ふて

第八十九圖



第一後頭位に於ける胎兒心音聽取の場處と體向及體勢とを示す

○は母體の臍下左側の點を示し×は兒心音の最も明かに聽き得べき部分を示す

觸知するに至る而して胎兒娩出の後には其顏面は母體の右上腿內側に向ふを見る兒頭は其骨盤通過の間產道の各部に

適合せんが爲に變形せざるべからざるが故に種々なる體位、體向に由りて各特異の外見を呈す之に由りて胎兒の何れの體位、體向を取りて娩出したるかを推定することを得べし而して後頭位にありては顱部より後頭の方に引きたる線の方向に延長せらるゝこと圖に示すが如し娩出期長く續く時は兒頭の下向部の最先進せる部分には所謂産瘤なるものを作る此産瘤は子宮口の兒頭に密接せる部分により兒頭の皮膚に於ける血液の還流を妨げらるゝか或は長く骨盤腔内に止ることにより頭部の皮膚に血液中の成分滲出して生ずるものなり産瘤を生ずる部位は胎兒の位置によりて

第九十圖

後頭位にて分娩せる初生兒頭蓋の延長したる形を示す

異なるものにして第一後頭位に在りては小顱門の近傍、右側顱頂骨の後方に在り、産瘤は兒頭の變形と共に二日の後に消失し普通頭蓋の形となる其他各頭蓋骨は其縫合部に於て少しく疊積して頭蓋の周圍を小ならしめ骨盤腔の通過を容易ならしむ其變化は分娩の直後には見を得べし通常第一後頭位に於ては左顱頂骨は右顱頂骨の下に在り此産瘤及頭蓋骨の疊積の度合によりて分娩の難易を判斷することを得べく又此等の徵證を綿密に認むるときは分娩の終りたる直後には分娩時の胎兒の位置を察し得べし然れども極めて容易に經過せる分娩の後には此等の變化を生ぜざることなり

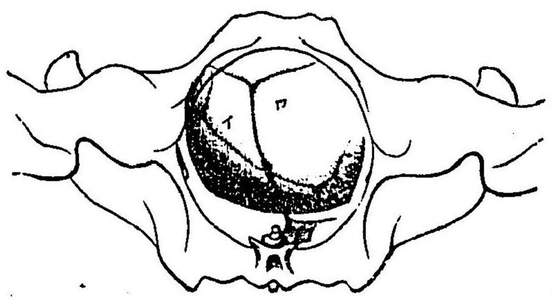
兒頭は骨盤内に於て前節に述べたるが如く廻轉を行ふて

恰かも骨盤腔に適當す骨盤上口に於ては兒頭は其最長徑を以て骨盤上口の横徑即ち骨盤上口に於ける最も長き徑線の上に位し骨盤腔に於ては其最も長き徑線即ち斜徑線に一致し骨盤下口に於ては兒頭の長徑は骨盤下口の最も長き徑線即ち其直徑線と一致す後頭位に在りては兒頭は大畧其小斜徑線に相當する最小周圍を以て通過するが故に最容易に骨盤内を通過することを得るも兒頭若し後頭位にあらざる位置を取る時は後頭位に於けるよりも大なる頭蓋の周圍を以て産道を通過せざるを得ざるなり故に後頭位は分娩時に於ける抵抗最も少なく從て其經過平易にして危害少なく且此位置を以て分娩するもの多きが故に之を以て正規分娩の位置となす

第二後頭位に於ける分娩の經過は第一後頭位に於けると同じくして只其體向の異なる爲に胎兒部分と産道との前後左右の關係を異にするのみなれば更に精細に之を述べず

即ち内診によれば兒頭骨盤上口に入れる頃には後頭は右に前頭は左に矢狀縫合は横徑線上にあり夫より更に骨盤潤の邊にまで進むときは後頭は右前方に前頭は左後方に廻轉し矢狀縫合は左斜徑線に一致す兒頭猶下降すれば

第九十一圖



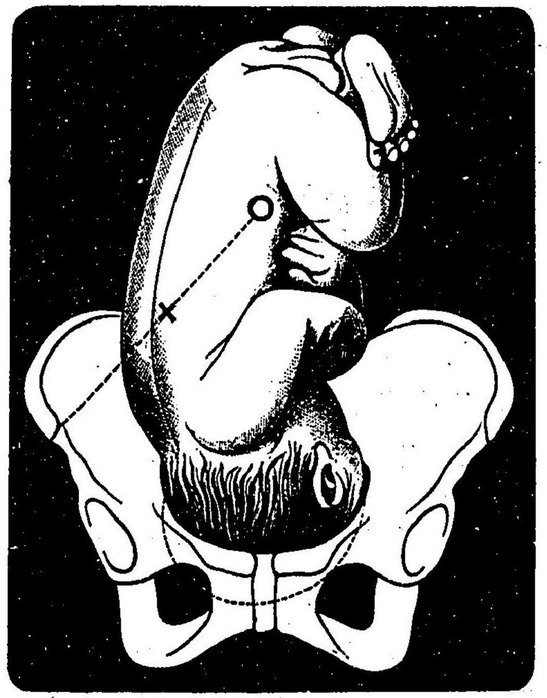
第二後頭位の分娩を下方より見たる想像圖

(イ)なる位置に小顖門あるときは兒頭骨盤潤に入らんとするとき

(ロ)なる位置に小顖門あるときは兒頭骨盤潤を去らんとするときを示す

後頭は耻骨縫合の下に前額は薦骨陷凹面の處にあり矢狀縫合は直徑線上にあること既に前節に述べたるが如し

第九十二圖



第二後頭位に於ける胎兒心音聽取常最も明かに心音を聞き得る處と體向と體勢とを示す

○は母體の臍を示し×は通

産瘤を生ずる時は左顱頂骨の後部小顱門の傍にあるを通常とす頭蓋骨の疊積は右顱頂骨は左顱頂骨の下にあり

外診に依りて兒頭は骨盤上口の處に兒背は右方に小部分は左方に臀部は上方子宮底部に觸る胎兒心音は臍と右側腸骨前上棘とを結合せる線の上に聽取するを通常とす

第八十八節　分娩經過の時間

分娩時間の長さは初産婦と經産婦とによりて異なり初産婦に在りては大凡九時間乃至十八時間平均十五時間なり其内最も多くの時は開口期に屬すべきものなり娩出期に殆ど二時間半、後産期は大凡半時間なり

經産婦に在りては概ね九時間を超えず平均七時間なり而して娩出期に大約一時間、後産期に大約半時間を要するを平均とす然れども往々經産婦は一二時間にて分娩を終るものあり

分娩に要する時間は甚だ一定せざるものにして上に述べたる處も只其標準を示すのみにして初産婦にても二三時間にて分娩を終るものなしとせず然れども初産婦にして二十四時間以内に分娩を終るが如きものは決して非常に困難なる分娩とは云ひ難し且經産婦にても數日を費やすものあり三十歳以上にて初回の分娩を營むが如きもの(所謂高年の初産婦)は分娩に時を費すこと大なるを常とす

第八十九節　分娩の際に於ける産婆の處置

産婆若し産床に招かれたる時は猶豫なく招きに應ずべき義務を有し産婦の貧富を論ぜず充分其務を盡すの覺悟あることを要すされど左の如き場合に其招聘を辭するは止むを

得ざるなり

一現に分娩の介助に從事し居る時

二己れが取扱ひ居る褥婦の中發熱せるものありて業を執るべからざる時

産床に招かれたる時は一定の産婆用器械と藥品と繃帶材料とを携へ用に臨みて之を用うべし其内には必要なる器械を漏なく備へ且つ必ず清潔に取扱はざるべからず

産婆の用うる諸器械は消毒し易き金屬製の函に容るゝを宜しとす若し布囊を用うる時は絶えず其保存と清潔とに注意すべし器械の内使用に堪へざるものあらば速に之を代へ綿紗綿の如きものは使用の後速に補ひ足すべし

新に器械を求めんと欲する時は最寄の醫師又は市醫郡醫等の

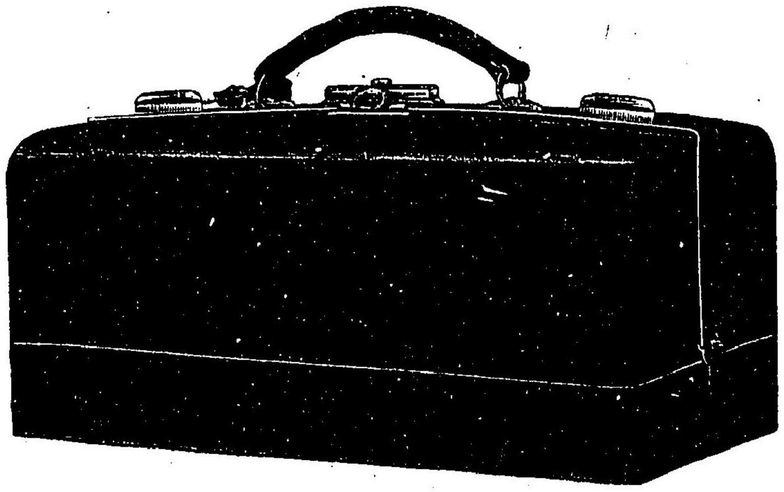
許に赴き問ひ合せ良き品を求むべし然らざれば用に堪へざるか或は甚だ不便なるものを得ることあり

最寄に藥舗なき時は産婆は消毒藥、綿紗、綿等を多量に貯へ置くべし而して消毒藥は必ず容器に其名箋と其稀釋の度とを記し一定の場所に貯へ其誤用を避くべし

器械を容るゝ函を清潔に保つ爲に不潔なるもの、消毒せざるものなどを決して其内に入るべからず器械は使用後必ず直に清潔に拭ひ消毒すべし若し己が分娩を取扱ひたる婦人後に産褥熱に罹りたる時は器械函と器械とを完全嚴密に消毒することを要す若し消毒に不便なる器械あらば必ず之を捨て新しきものを用うべし

産婆は其器械の容器を産家に遺留することを許さず介助

第九十三圖



著者の考案せる産婆用具の外被革製)を示す

終るや否や必ず自ら携へて歸宅すべし若し其内に有害なるものありて爲に不測の危害を來すときは産婆は其責をのがるゝこと能はざるものなればなり

産婆用器械として備ふべきものは次の如し

(一)洗水器　内容は一乃至三リートルなるを宜しとす而してゴム管三尺乃至五尺を附屬せしむべし

(二)膣洗滌用嘴管　硝子製のものは消毒に便なれば之を用うるを宜しとす然れども角、ゴム、金屬等にて造りたるものにても宜し金屬にて造りたるものは昇汞水を用うる時には使用に堪へず

(三)浣腸用嘴管　硝子製のものを宜しとすれども角製のものにても可なり

(四)小兒用浣腸器

(五)聽診器

(六)檢温器　は體温を測定するものゝ外猶浴湯の温度を測るものを具ふべし

(七)カテーテル　金屬を以て製し婦人に適するものと其他に軟かき彈力性を有するゴム製のもの(ネラトン式カテーテル)とを備ふべし

第九十四圖

産婆用具の内容(其一)

硝子製嘴管	二個	臍帶剪刀	一個
浣腸用嘴管	一個	剪刀	一個
小兒用浣腸器	一個	ピンセット	一個
體温檢温器	一個	金屬製カテーテル	二個
浴湯檢温器	一個	ネラトンカテーテル	一個
		氣管カテーテル	一個
		卷尺	一個
		聽診器	一個
		爪鑢	一個

(八)臍帶剪刀

(九)小兒氣管用カテーテル　直徑三乃至四密迷なる彈力性を有するものにて其尖端に開口するものなり若し適當なるものを得難きときはネラトン式カテーテルの相當の太さを有するものを尖端に近く側壁の孔の上部にて切り其斷端を丸めて用ゐ得べし醫學士中島襄吉氏の工夫せられたる氣管用カテーテルは第九十五圖に示せるが如くカテーテルの間に硝子製の膨れたる部分を夾み吸引したる粘液等を吸込まざる

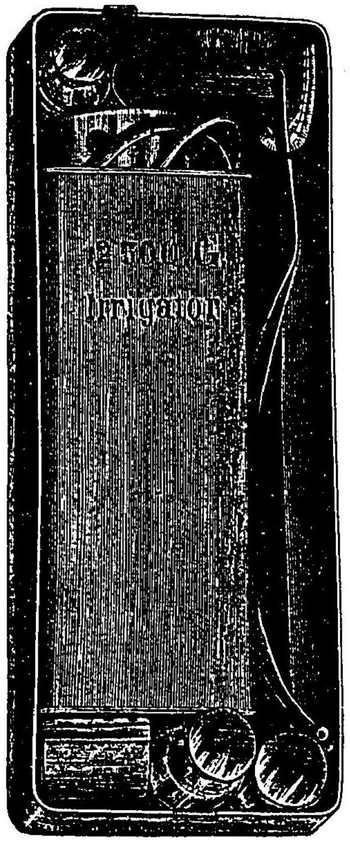
第九十五圖

中島氏の氣管カテーテル

ここを圖りたるものにて實用上甚便利なり

(十)臍帶結紮に用うる絲又は紐及び其容器

第九十六圖



產婆用具の內容(其二)

二五〇〇瓦入洗水器	一個	石鹼容器	一個
繃帶材料容器	一個	硝子瓶	二個
臍帶結紮絲容器	一個	點眼裝置	一個
ゴム管	一本	ワセリン容器	一個
爪刷毛	二個	骨盤計	一個
液量器	一個		

全容器に約五千瓦を入れ其傍らに度目を盛り凡其量を知ることを得せしむ

(十一)爪刷毛及び爪鑢
(十二)石鹸及び其容器
(十三)消毒せる繃帶材料(綿紗、綿、膿繃帶等)及其容器
(十四)リゾール又は石炭酸
(十五)ホフマン氏液
(十六)二%即ち五十倍硝酸銀水及點眼裝置
(十七)等分亞鉛花澱粉
(十八)液量器
(十九)骨盤計　之を缺こゝを得るも携帶する方を便利なりとす
(二十)卷尺(二メートルのもの)
(廿一)剪刀
(廿二)ピンセット　種々應用の場合あれば之を携ふべし

(廿三)止血鉗子　二個
(廿四)ゴム布　大巾にて三尺乃至四尺あれば可なり或は桐油紙を以て代用し得べし
(廿五)手術衣
(廿六)手拭
大抵は此等のものを備ふれば可なり而して之を容るゝ處の器は用に臨みて器械を消毒し又消毒したるものを入るゝ處の皿となし得べく製作するを便なりとす
著者の考案せるものは圖の如きものにして消毒、携帶に便にするを目的とせり其他諸氏の考案に成るもの多種あり
産婆は産床に到ればまづ此婦人の分娩は既に始まれるや否や且其分娩は何れの邊まで進めるかを確め次に正規

の分娩を期し得べきや否やを判斷すべし是等の點を明にするには周到なる診察をなすことを要す即ち産婦の訴ふる處の疼痛が陣痛なりや又此疼痛が規則正しく起るや否やを吟味すべし次に外診を行ひ若し必要と認むる時は内診をも行ふべし

手指の消毒の爲に産婆は金盥又は鉢の如き器の中に前に述たるが如き温度を有する清水をとり他の器の中に三十倍の石炭酸水又に百倍のリゾール水を容るべし又消毒法は既に前に述べたる方法によりて診察前に行ふべし産婆自ら産婦の分娩始まれること及分娩が如何ほど迄進みたるかを確めたる上は産婦の傍を離れず分娩に必要なる準備を殘りなく整ふべし又産婆は折を見て産室に充つべき室を求むべし其室は靜穩にして光線の射入よき階上にあらざる室を宜とす産婆は家人の中より沈着にして用に立つべき婦人一人を選び室内に於て用を足さしむるの外無用の人は悉く室内に入らしむべからず室は空氣の流通を能くし適宜攝氏二十度位華氏ならば七十度位に温むるを宜しとす

此に於て産床を構造すべし産床は三方より近寄り得べき樣にし藁布團又は通常の臥褥を用ゐ其上にゴム布及敷布を布く尙産婆は適量の殺菌水及び多量の沸湯を用意せしめ消毒、初生兒の沐浴又は湯婆等に用うるに差支なからしむべし若し暇あらば産婦に全身浴をさらしむべし産婦の衣服は成るべく寛濶にして清潔なるものを用ゐしめ産婦に排尿及灌腸を施して膀胱及直腸を空虛となすべし其他必要なる器械

類、臍帶結紮用の紐、消毒藥、繃帶材料等を備へ尙産婦の興奮劑
として葡萄酒或は他の酒類を用意すべし
産婆は常に其産婦の看護を擔任する時必ず毎二時に一回檢
溫器を以て體溫を測ることに習熟すべし又産婆は浴槽、
臥床及凡て嬰兒に必要なる用意を忘るべからず
産婆は診察によりて其經過正規なるべしと考へたる時は自ら
分娩の世話を擔任して可なり若し正規の分娩にても醫師を
招かんとせば産婆は其招聘に故障を云ふことなく寧ろ之を
歡迎すべし何となれば正規の分娩なりと思ひたる時にも如
何なる急變の起りて醫師を要することなしと限らず而して
産婆は豫め之を知り得ざることあればなり故に産床に於て
醫師と共に分娩を介助するときは若し産婦に急變起るとも

直ちに手當をなし得る故に産婆に取りては甚だ利あること
なり若し異常の起らんとするか或は既に起りたるときは時
期を失はず速に醫師を招かしむべし
分娩の第一期即ち開口期の初めには産婦は室内を歩行するも
差支なし而して陣痛來る時は何か堅固なるものにたよらん
とするものなれば其心して之を助くべし
産婦若し陣痛發作に際し努責する時は之を禁ずべし陣痛
强烈にして荐りに續きて發作し疼痛益加はる時は同時に血
液を含める粘液漏出するものなり之を期として産婆は産婦
を産床に伴ふ若し然らざるも陣痛强劇なれば産床に就かし
むべし而して胎胞破裂の後産婆は直に尙一度内診をな
すべし而して其時には分娩經過に異常なきや兒頭骨盤

内に正しく進み來れりや、小部分或は臍帶が垂脱し居らざるやを確むべし然れども破水の後にても引續き胎兒心音に少しも異常なく母體にも異狀なくば内診せざるを宜しとす其外の場合に於る内診は出來得る限り之を避くべし娩出期三時間以上に渉る時は産科醫を招かしむることを要す

分娩經過中度々胎兒の心音を聽くべし殊に破水の後は毎十五分又は毎二十分位に之を聽取し其性質に異常なきや、其速に異常なきやを檢すべし是れ殆ど胎兒の生死を判斷すべき唯一の根據なればなり又第二期即ち娩出期の末に至れば陣痛發作に際し腹壓を加ふるをよしとすれば只陣痛の起り來る時にのみ努責することを教へ無益に努責せし

欠

MISSING

兒頭の娩出するや否や産婆は必ず其口及鼻を拭ひ羊水、血液、粘液等を吸入せしめざる樣注意すべし殊に軀幹の娩出と共に羊水の全部流出する時に注意すべし

又嬰兒の頸部に臍帶の纏絡あることは五六回の分娩に一回位の割合なれば忘るゝことなく之を檢すべし斯る事なきを見ば肩部の撥露するまでは次の陣痛に注意すべし若し頸部に臍帶纏絡せば之を弛め且兒頭を超えて外すことを試るべし然れども臍帶緊張する時は之を外すことを得ずして纏絡せる臍帶は次に軀幹の娩出するに際し胎盤の附着せる處を強く引きて離斷し或は出血を起すの虞れあれば産婆は剪刀を用ゐて臍帶を切斷すべし之をなすには先づ臍帶を大凡二指横徑の距離を取りて二箇所にて結紮したる後に切斷

すべし或は先きに結紮をなさずして切斷したる臍帶の兩端を持ち居るか止血鉗子(出血を止むる爲に特に作られたる器械なり)にて挾み置きて嬰兒の娩出後直にまづ兒體に附着し居る方の臍帶を結紮し次に他の端を結紮すべし之れ成るべく嬰兒の血液を失はざらんが爲なり臍帶の切斷を行ふ際には充分注意して母子共に損傷を受けしめざる樣にすべし即ち臍帶を少しく扛げ其下に剪刀の一の刄を挿入し初生兒を傷けざらんが爲に剪刀の全部を左手の中指と示指とにて掩ひ然る後靜に臍帶を切斷するなり

兒頭娩出したる後肩胛部の娩出甚だ遲延し 嬰兒の顏面甚だしく紫赤色となり危險の恐ありと認むる時は先づ子宮底を環狀に摩擦して陣痛を促し十分に收縮せる子宮底に壓

を加へ産婦にも努責せしめて晩出を謀るべし若し之れに依りて目的を達せざるときは徐かに一手の示指を會陰部より膣口に送り後方に在る腋窩に掛け徐かに會陰に向て引きつゝ下方に引く然る時は前方に在る肩先づ娩出す兩肩共に娩出すれば大抵次の陣痛にて軀幹娩出するものなり若し猶軀幹の娩出遲延せば背の方より右の腋窩には左の示指左の腋窩には右の示指をかけ徐かに前方に回しつゝ下方に引くべし肩胛娩出せば軀幹の娩出は殆ど介助を要せずして容易に經過す

第九十一節　初生兒臍帶の剪斷

初生兒の生るゝや否や母の兩脚の間に横たへ臍帶の緊張せざ

る樣にしその口、鼻等を拭ひ且つ此等を壓迫することなくして自由に呼吸を營み得るやうに注意すべし而して産婆は初生兒が生活し居り且規則正しく呼吸し居るや否やを確むべし初生兒の高聲に泣くは正しく呼吸の起りたる確かなる徵なり若し啼泣の不充分なるか全く啼泣せざる時は之を泣かしむることを試むべきも呼吸適度なる時には臍帶脈搏の存在する間は其儘になし置きて之を剪斷すべからず其間に必ず左の事柄に注意すべし

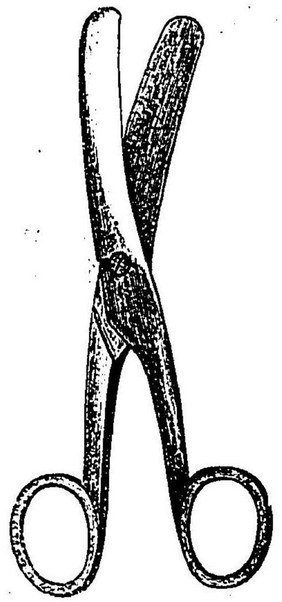
(一)子宮の上に手を貼して其能く收縮せるや否やを確かめ子宮底の高さを定め且之と同時に子宮内に第二の胎兒の存するや否やを確むべし

(二)母體より出血なきや否や若し出血あらば其何れより

する かを檢し若し多量に出血する場合には臍帶動脈の搏動の止むを待つことなく速に臍帶を剪斷し然る後止血の方法を圖るべし

異常なきときは臍帶動脈の脈搏止むを俟ちて臍帶を剪斷すべし即ち臍より大凡二指横徑を距りたる處にて丈夫にして柔かなる紐又は麻糸にて臍帶を結紮すべし其際産婆は次の諸項に注意すべし結紮前に兩手の拇指と示指とを以て結紮すべき場所に附着せる膠樣質を成るべく擦り去るべし之れは結紮を堅くし後に至りて弛まざる爲にするなり

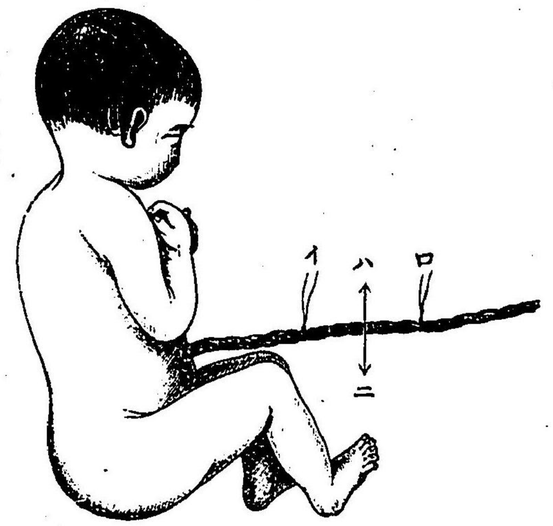
第九十九圖



臍帶剪刀の圖

其上尚念を入れ一度結紮したる後更に其紐の兩端を臍帶の周圍に回はして再び結び玉を作るべし一の結紮成らば更に之れより胎盤の方に殆んど二指横徑を距てゝ同樣の方法を以て第二の結紮をなすべし然る後兩結紮點の間を左手にて臍帶を被ひて母兒の損傷と血液の飛散とを防ぎ臍帶剪刀を以て切斷すべし是に於て小兒を温き襁褓又はフラネルの中に包み安全なる場所に置き絶ず臍帶の斷端より出血せざるや否や初生兒は正しく呼吸し居るや否やに注意すべし

第百圖



臍帶を剪斷する樣を示す

(イ)は臍輪より二指横徑を距りたる處なり即ち(イロ)の二箇處にて結紮し其間の(ハニ)の處にて剪刀を用ひて切るなり

第九十二節　後産期に於ける産婆の處置

此時期に於て産婆のなすべき務は一手を子宮底部に當てゝ子宮收縮の狀態を監視することなり若し子宮能く收縮せる時は硬く觸れ子宮底は臍の高さに在り若し柔軟となり膨大する時は收縮不良なるものと知るべし其他外陰部の前に消毒せる綿を當て之を押へ置くべし之によりて小傷を被ひ以て小出血を止め且出血の多少をも知ることを得るなり而して産婦の兩脚は延ばして床上に横へしむるも可なり産婆は後産期に於ける子宮の收縮即ち後産期陣痛の來るや

否やに注意すべし産婦は胎兒娩出の後數分を經て陣痛と共に少量の血液が流出するを感ずべし此陣痛發作は第二期の終りの如く強烈ならずして間歇も亦長し而して後産娩出の爲には必要なるものなれば只靜かに其有樣を觀察すべし然れども若し子宮柔軟となり又は膨大せるを認むる時は子宮底を環狀に摩擦し其收縮を促すべし

數回反復せる陣痛にて胎盤は全く剝離し腟まで降り此部に充塞し往々外陰部に膨隆するを見ることあり此時は子宮の上に輕く壓を加ふれば胎盤は外陰部へ壓し出さるべし胎盤娩出せば兩手を以て之を受け之を或一定の方向に捩り回せば胎盤の上を被ひたる卵膜は捩れて索狀となり徐々に滑り出づべし若し叨りに之を牽き出さんとすれば却て卵膜を破

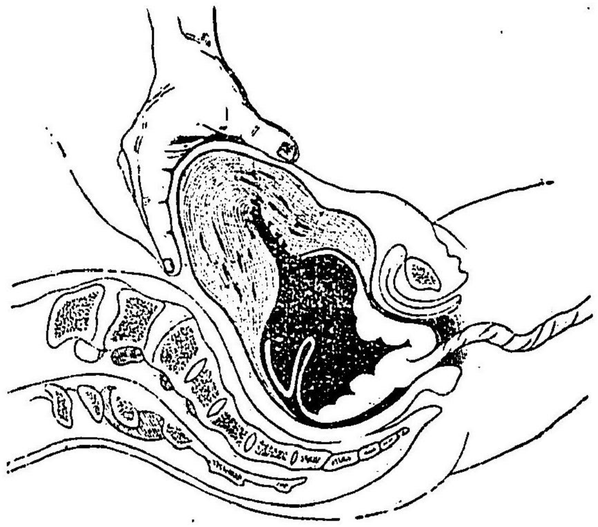
り之を子宮内に殘すの虞あり故に決して引き出すことなく只捩轉するのみなるを宜しとす又未だ娩出せざる後産を早く出さんとして臍帶を牽くことは堅く禁ずる處なり之により容易に卵膜を破り又は子宮内に卵膜の一部或は胎盤組織を殘留せしめ或は臍帶を離斷し出血を來し或は子宮の翻轉を來すの虞れあればなり往々強き後産期陣痛あるにも關らず胎盤の娩出せざることあり其時には先づ膀胱の充滿せるや否やを檢し若し之あらば導尿を行ひて猶暫く後産の娩出を監視すべし若し胎兒分娩より大凡一時間を經たる後に猶後産の娩出なきときには陣痛發作の有樣を觀察し其發作と共に外部より子宮を壓し後産を除去せんことを試むるも可なり即ち拇指を子宮の前面に他の四指を其後面に置

きて腹壁より子宮底を掴み前後兩壁を壓しつけ同時に全子宮を後下方に(即ち骨盤軸の方向に)壓すべし然れども此壓は陣痛發作時に於てのみ加ふべきことを忘るべからず故に若し陣痛弱き時は壓出するに先ちて子宮底を環狀に摩擦し其收縮を促がし充分に收縮の起るを待ちて壓出を謀るべし然らざれば子宮翻轉又は子宮の一部痙攣等の如き不幸なる出來事に遭遇することあればなり大抵の場合には此方法によりて後産を終らしめ得るものなり此法をクレデ氏の法と云ふ

後産期に過度の出血あるか前に述たるが如く胎盤の壓出を試むるも娩出せざるときは醫師を招かしむべし

娩出せる後産は室外に出し冷かなる場所に置かしむべし而して産婆は褥婦を手當し終り其安全なるを確めたる後に後産が完全に娩出したるや否やを檢査すべし

第百一圖



クレデ氏の方法により胎盤を壓し出す樣を示す

後産の完全なることは胎盤に缺損なきこと卵膜の破綻せる口のみにて其外には缺損せる部分なきことに由りて知る若し之を檢査して完全なること明かならざるか或は醫師の來るを待つべき場合などには毎に之を醫師の檢査に供ふべし

卵の總ての部分即ち胎兒、卵膜、胎盤、臍帶娩出し終れば分娩は終りを告ぐるものなり然れども産婆の職務は此時に終るものにあらずして分娩後尚二三時間は褥婦の傍に在らざるべからず何となれば此時に於て危險なる出血なきを保せず又褥婦は不安にして尚切に産婆の補助を乞ふことあるものなればなり分娩が夜中に起りたる時にも必要に應じ産婆は徹夜産婦の傍に在らざるべからず

第九十三節　分娩後の取扱法

後産の娩出したる後尚子宮の收縮完全なるや否やを確むべし收縮充分なる時には耻骨縫合の上方に於て子宮を硬き球狀のものゝごとして觸る斯る場合に産婦又は初生兒に他の介

助を要するときは確なる助手又は家人に委任して其狀態を監視せしむるも可なり然れども其硬き球狀のもの柔軟となるを覺えたる時は速かに之を告げしむべし然らざれば不意に大出血等を來すの危險ありとす若し收縮佳良にして危險なくば後産凝血及汚染したる下敷等を取り片附くべし其場合には成るべく褥婦を煩はさず褥婦自ら身體を動かさゞる樣注意すべし爰に於て産婆は微溫の三十倍石炭酸水又は百倍リゾール水に浸したる綿又は布片にて外陰部を洗ひ且つ拭ひ去るべし其際外陰部、會陰部の裂傷等の有無を檢し若し之れあらば醫師を招聘するの期を失ふべからず外陰部を洗ひ終れば股より下腹部を洗ひ又は拭ひ外陰部には消毒せる綿又は綿紗を當て置くべし此等の事終れば褥婦には足を伸

して臥さしめ産婆は後産の終りてより猶二三時間子宮の收縮を監視し出血の起るや否やを注意すべし

古へは此時期に褥婦に睡眠することを禁じたり之れ褥婦と共に産婆も亦眠りに陷ることありて若し斯かる際に出血あるも之を知らずして適當なる時期に適當なる處置を行ふことに能はずして大なる危險に陷ることあるを以てなりされど産婆が誠實に其職務を盡す時には褥婦の睡眠することは少しも妨げなきことなり分娩後三三時間を經過し且つ萬事整頓したる時は褥婦を産褥に移すべし而して其間猶小兒の看護を怠るべからず

最後に注意を加へんと欲することは初生兒分娩の後は屢其處置にのみ心を奪はれ母體の處置を顧みざることあ

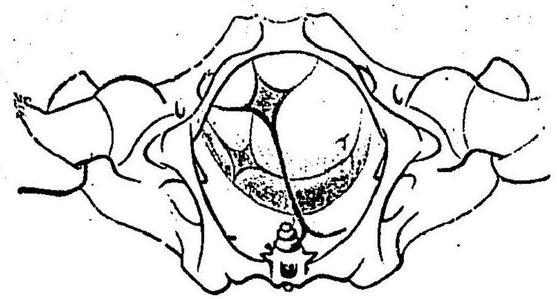
りて子宮收縮の不良なるに心附かずして瀕死の危險症狀を起すに至ることあれば初生兒と共に母體の處置を忽にすべからず

第九十四節　後頭位分娩の違例

兒頭は其下降に際し往々前述のものと全く反對の廻轉をなすことあり即ち兒頭骨盤上口に入りて後、後頭は漸次前方に向て廻轉するを常とするに後方に向ひて廻轉することあり其經過次の如し

第一後頭位よりするものに於ては兒頭は通例の如く骨盤上口の横徑線に入り來り後頭は左方に前額は右方に在り分娩の進むに從ひて兒頭は漸次下降し後頭は後方に向ひて廻轉し

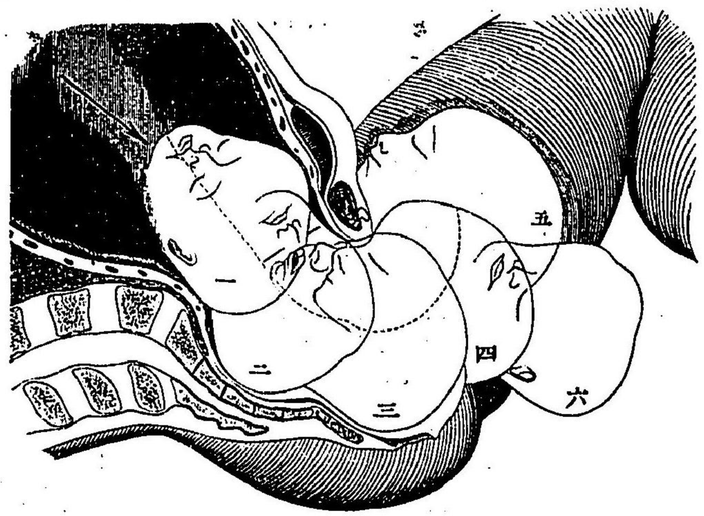
第百二圖



第一前頭位の分娩を下方より見たる想像圖（ィ）及び（ロ）の關係は第八十四圖第九十一圖に於けると同じ

左側薦腸關節の近傍に在り前額は右前方即ち右側閉鎖孔の近傍に在りて矢狀縫合は左斜徑線（第二斜徑線）上に在り次に後頭は更に後方に廻轉し薦骨陷凹面の上に前額は恥骨縫合の後下方に矢狀縫合は骨盤下口の直徑線上に來る其後の經過は樣々なれども多くの場合に於ては兒頭は尚骨盤底に於て強き廻轉をなし後頭は前方恥骨縫合の下に達し然る後第一後頭位を以て生るゝことあり然れども時として後頭は後方に前頭は前方に向ひたるまゝにて生るゝことあ

第百三圖



第一前頭位に於ける兒頭の産道を通過する狀態を示す

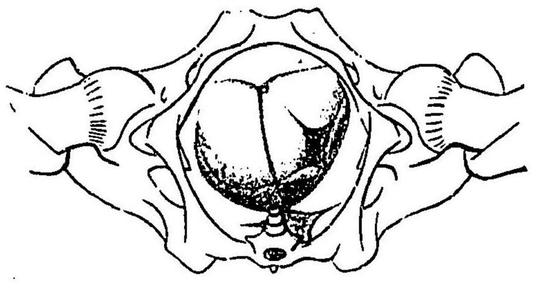
り然る時は前額は恥骨弓の部に壓定せられ先づ顱頂部次に後頭部は會陰を滑りて娩出し然る後前額は恥骨弓部を離れて娩出し顏面は恥骨縫合の下より娩出す是れ即ち第一前頭位なり即ち第四頭蓋位又は第一前顱位と稱せらるゝものなり

外診に依りて此位置を診定すべき確かなる標準は少

第百四圖

前頭位分娩に由りて起る初生兒頭蓋の變形

第百五圖



第二前頭位の分娩を取り過ぎたる其中二位の經過のなる正規の狀態を示すものとの後に經過の第二頭位の狀態

細口頭も骨盤に入るは直後上の狀態なるに太し骨盤の上口に於ては骨の縫合線を示すのとき

し其狀態は第一後頭位と異なる處なくして只兒背が後方に偏せる爲に前方に廻轉すべき後頭が反對に後方に廻轉することあるを知るのみ之に反して內診によりて吾人が後頭位と大に異なりと感ずる處のものは甚容易に大顱門を觸れ得れども小顱門は骨盤上口に於ても薦骨陷凹面に於ても見出し難きことなり

此位置に於ける分娩の際產婆は

之を介助することゝ中々困難なり之れ兒頭は後頭位に於ける よりも太なる周圍を以て陰裂より出づる爲に會陰部甚だしく膨隆し其部分に裂傷を生じ易きを以てなり故に會陰の保護には一層注意すべし

此位置にて分娩せるとき產瘤を生ずれば大顱門の右側に於て之れを見る兒頭の變形は圖に示すが如し

第三前頭位は第三後頭位の廻轉の異常と見做し得るものなり即ち第三頭蓋位又は第二前顱位と稱せらる其廻轉の模樣は前に述べたる第一前頭位と比較して考ふれば容易に明瞭なるべし

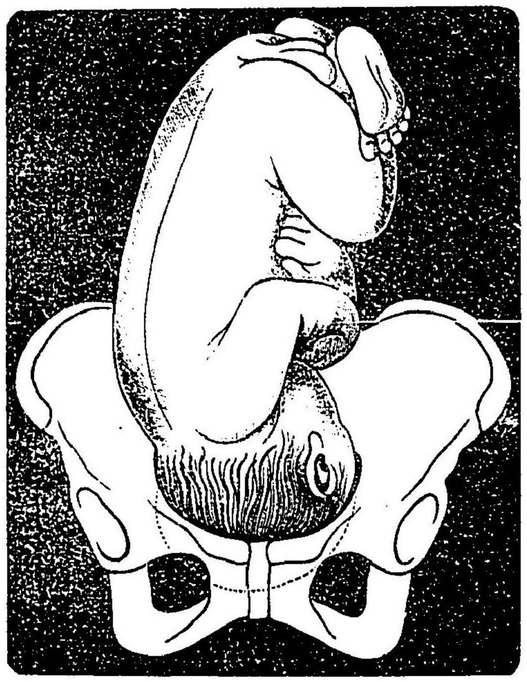
故に第一及び第二の前頭位は其固有の經過をとりて骨盤下口に迄來るも多くは强き廻轉をなして第一前頭位は第一後頭

位に第二前頭位は第二後頭位に移りて娩出せられ其然らざるものは固有の位置を以て娩出するなり後頭位の分娩に於て尚違例となすべきものは兒頭は骨盤下口に至る迄廻轉をなすことなくして下降し兒頭の矢狀縫合は骨盤上口より其下口に至るまで横徑線に一致して降るが如き場合なり此場合には常に醫師の助を要するものなり

第九十五節　顏面位

後頭位に在りては兒頭は其最小なる周圍を以て骨盤内を通過するが故に分娩は最も容易に經過すべきなり然れども若し兒頭が他の部分を先進せしめて生れ出る時即ち或は前額を先進せしめ或は顏面を先進せしめて生れ出る時は兒頭に於

第百六圖

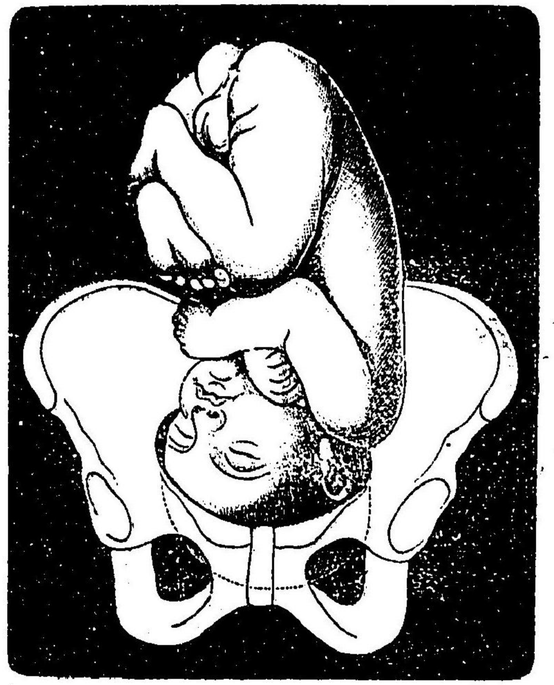


後頭位の體勢を示す

ける最大なる直徑並に最大なる周圍を以て産道の内を通過せざるべからず之が爲に分娩は著く困難となり兒頭は大なる變形をなすも猶屢分娩の阻止せらるゝことありて不幸なる障害を生じ易きものなり故に産婆若し前額位又は顏面位なることを認めなば直ちに異常分娩として取扱ひ産科醫を招くことを忘るべからず

顏面位に於ては頤部

第百七圖



前頭位の體勢を示す

此等の位置に於て頤部が胸壁より離るゝものにして頤部は甚だしく胸より離るゝこと顔面位に於けるよりも少きときは前額は最も先進し前額位となる頤部が只少しく胸より離れたるのみなる時は前頤頂部先進して前頤位となる

も同一なりと雖も只其度合によりて先進部を異にす

而して後頭位に於て第一體向、第二體向を區別せし如く兒背が左に向へるか右に向へるかに從ひて第一顔面位、第二顔面位を區別す

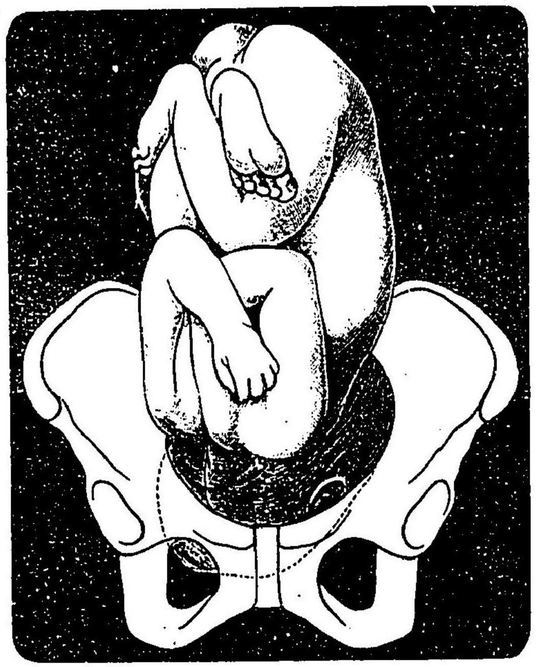
第九十六節　顔面位の診斷

兒頭若し第二顔面位を取る時は外診によりて次の如き所見を得べし

骨盤の上方に於て胎兒の下向部に觸るゝに多少の熟練と注意とを以てせば兒頭の伸展せるを認むること難からず後頭は著く左方耻骨地平枝の邊にありて兒頭と背との間に深き溝を觸る是れ兒頭の甚しく伸展せられ背部に近きたる爲に生ずるものにて背は子宮の左側に小部分は右側に觸る而して

子宮に於ける胎兒の各部の狀態を考ふるに其胸部は背部よりも前腹壁に近くが故に第一顏面位に於ては胎兒の心音を胸部に相應して中央線よりも右側に於て明に聽取し得べし（第一後頭位に於ては心音は左方に於て明なり）

第百八圖



顏面位の體勢を示す

顏面位に於ては內診に多少の困難あり之れ吾人の觸るゝ處の顏面容易に腫大し輕卒なる檢査にては軟塊に觸るゝが如くなるによるものなり顏面の位置を定むるには其硬部即ち突隆せる鼻梁を求むるを宜しとす鼻梁は三角形をなせる特異の形狀と二個の鼻孔とによりて知るを得べし既に鼻孔を見出せば他の部分を見出すことは容易なり而して鼻根よりは前額縫合に達し其兩側に眼窩を觸れ鼻梁の兩側にして眼窩の下には上顎を觸れ猶其下には口を觸れ靜かに其內に指を入るれば齒槽突起及び舌あり時としては吸乳運動を營む猶其下方には下顎及頤部を觸る凡て此等の內診は小心翼々として行はざるべからず是れ眼球、口腔粘膜の如き軟弱なる部分は損傷を與へ易く爲に懼るべき結果を起すことあると顏面位に於て胎胞の存在せる間は之を破れば分娩の經過を不良ならしむるが故に成るべく長時間之れを保存すべきを以て

なり然れども顔面位の鑑定を爲すためには今述るところの諸部分を悉く觸知すること肝要なり譬へば若し下顎を觸知せずして大顱門を觸ることを確かなる時は顔面位にあらずして前額位なるべきが故に其區別を明かにする爲に必要なり

後頭位に於ては矢狀縫合の方向によりて兒頭の骨盤に於ける位置の關係を示したるが如く顔面位に於ては顔面線(顔面長徑)即ち前額より頤部まで引ける線によりて骨盤内に於ける顔面の位置を定む又鼻梁が此線上を走るが故に鼻梁に重きを置き次の如く云ひ得べし即ち鼻梁(又は顔面線)横徑線上に在り故に顔面横徑線上に在りこ又顔面位にありては頤部は常に先進するを以て其所在を明にして後頭位に於ける頤

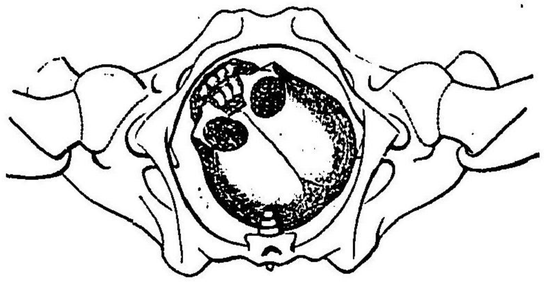
門の如くに考ふるを便なりとす

第九十七節　第二顔面位分娩の經過

骨盤出口の上に於て顔面は骨盤の横徑線上にありて頤は右に前額は左に在り陣痛の作用によりて兒頭骨盤内に來る其際頤は先進して下降し同時に前方に向ひ之れによりて顔面は骨盤内に於て左斜徑線(第三斜徑線)を經過し然る後骨盤下口に來り顔面線は縱徑線上にありて頤は右側の耻骨弓脚の下に達し初めて陰裂の間に表はれ次に口次に前額を陰裂の間に見るに至り最後に會陰は後頭の上を超えて滑脱す此時會陰は甚だしく緊張するが故に甚だ破裂し易く會陰保護に付充分の注意をなすも猶裂傷を免れざること多し從

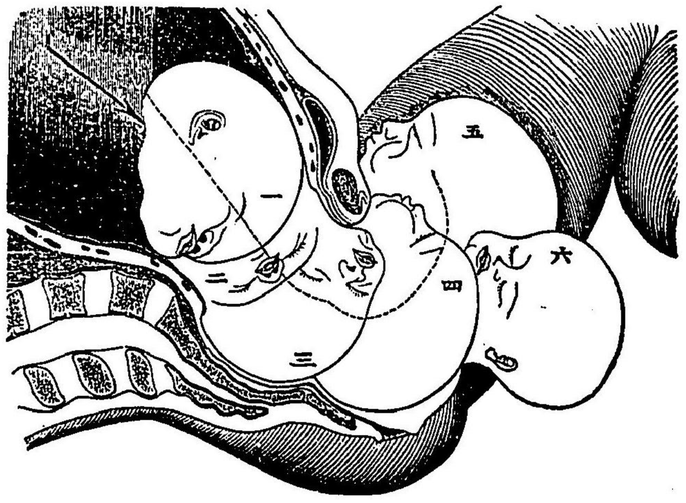
て兒頭の通過も亦困難にして兒頭は固有の變形(第百十一圖)

第百九圖



第一顔面位の分娩を下方より見たる想像圖

第百十圖



第一顔面位の分娩に於ける兒頭の通過を示す態狀を示す

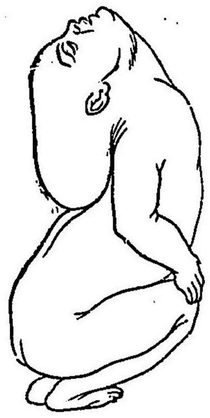
數字は順序を示す

を受け生後尚此變化を認め得べし前額は低く鼻は上に向きて小さく見へ眼窩及口唇腫脹せり

産瘤は第一顔面位に於ては右口角の部に生ず

第二顔面位に於ける分娩經過は第一顔面位の經過を了解せば自ら明らかなるべし即ち骨盤上口にては頤は左方に前額は右に向ひ顔面線は横徑線の上に在りて分娩の進むに從ひて頤は前方に前額は後方に向ひて廻轉し骨盤腔を通過する間には顔面線は右斜徑線(即ち第一斜徑線)を通過し頤は左前方、前額は右後方に向ひ猶進みて骨盤下口に至りては頤は左側恥骨弓脚の下に前額は薦骨陷凹面に來

第百十一圖



顔面位分娩により起る初生兒頭蓋の變形を示す

る産瘤は左坦角の部に生ず

顔面位に於ては分娩の困難なること多きは既に前に述べたるが如し故に必ず醫師を招き其指圖を受くるを宜しとす

殊に顔面位に於て頤部の廻轉前方に向はずして後方に向ふこと恰かも後頭位の違例の場合に於て後頭が後方に廻轉する如くなることあり斯る場合には殆ど常に自然産をなし得るの望なく必ず醫師の介助を要するものなり

又顔面位にて生れたる嬰兒は産瘤の爲に顔面甚醜悪なることあれば直に産婦をして之を見ることなからしむるか或はよく之を注意して後に示すべし

第九十八節　前額位

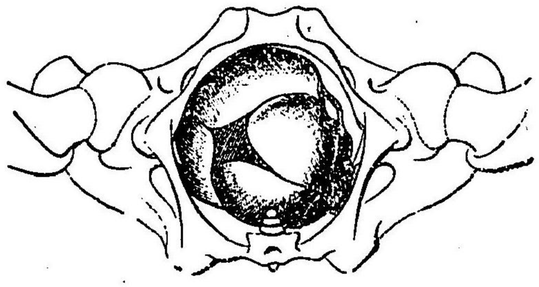
前額位に於ては兒頭は最大周圍を以て分娩するが故に最も不良の位置なりと雖ども幸にして此位置の分娩は甚だ稀なる

と始め前額位を以て經過するも後には屢々顔面位又は前顔位となることあり

外診によりて得る處の狀態は顔面位に於けると殆ど同じきも内診によりては口及下顎に達し能はざることを以て區別し得べし

骨盤上口に於ては前額縫合は横徑線上に在るも下降の際には前額は前に顔頂部は後に向ふ陰裂

第百十二圖



前額位に於ける分娩を下方より見たる想像圖

に於ては初めは前額次に眼現はれ然る後顱頂部は會陰を超えて出で然る後耻骨弓の下より上顎、口及下顎現はる産瘤は前額に生ず兒頭は固有の狀態を有すること圖に示すが如し

第百十三圖

前額位分娩により起る初生兒頭蓋の變形を示す

此位置に於ても亦分娩甚だ困難なるを通常とすれば醫師を招くを宜しとす

第九十九節　骨盤端位

骨盤端位を以て分娩開始せらゝ時は自然の力のみによりて分娩を遂げ得べし然れども此分娩に於ては胎兒の臍部まで娩出したる後生命に關はる程大切なる場合あるものなれば

往々醫師の援助を藉るべき必要あり

即ち臍部の娩出せるときより兒頭の娩出するまでの間に軀幹或は兒頭と骨盤との間にて臍帶の壓迫せらるゝ爲に臍帶の中の血行を妨げ或は之を止むることあり若し臍帶中の血行中止すれば直に嬰兒は呼吸運動を始むるも空氣を吸入ることこと能はざれば粘液、血液羊水等を氣道に吸込みて窒息に陷るものなり嬰兒若し此狀態に在ること數分なちば必ず死すべきものなるが故に臍部迄娩出せるも尙軀幹、頭部等の娩出に時間を要するが如き場合には産科醫自ら手を下して分娩の進行を促すべきものなり然れども此際には母子共に容易に傷害を受くることあるものなれば熟練なる産科醫を招くべし故に産婆若し骨盤端位分娩の診定をなさば直に産科

醫を招聘すべきことを産家に告ぐべきものなり

第百節　骨盤端位の分類

第百四十圖

第一尾骶位を示す

尾骶部先進し兩下肢胸面に向ふ如き狀態にて娩出する時には單純尾骶位又は單純臀位と云ひ兩下肢上方に向へども膝に於て屈曲し足部は臀部の近くに在る時は

不純尾骶位又は不純臀位と云ふ兩脚上方に向ふことなく下方に向ひて延長する時は完全足位と云ふ若し一脚のみ延長する時は不全足位と云ふ此の場合に於ては足部最初に出るなり足位に於て膝關節曲り居る時は膝が最も先進す之を膝位と云ふ膝位にも亦完全膝位不全膝位を區別す

第百一節　骨盤端位の診斷及分娩經過

斯く骨盤端位を色々に分ちたれども外診によりては何れも同じ樣なる狀態を見るのみ內診によりて始めて各精密に區別し得るなり

外診に依りては耻骨縫合の上方に於て不正にして硬きも頭部

に比すれば小にして柔軟なる先進部を觸知す之れ臀部なり背部は右若しくは左に在りて子宮底に大ひなる硬き球狀のものを觸る是れ兒頭にして一手より他手は恰かも水中に浮べる護謨球の如く感觸し得るものなり

臀部を探る時にも水中に於ける浮球の感あり然れども兒頭を觸るゝ時の如く著しからず之れ臀部は直に軀幹に連りて廣く附着するを以て頭部の如く動き易からざればなり心音は胎兒の體向によりて右若くは左に於て大約臍の高さ又は臍より上方に聽取するものなり

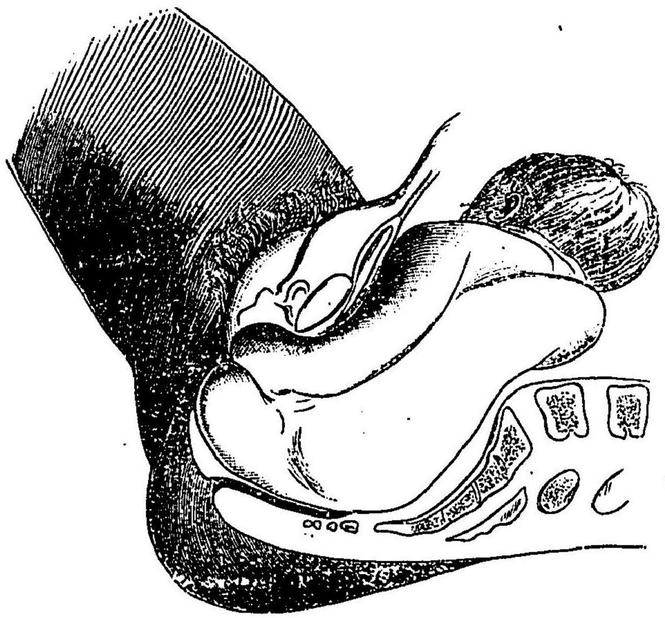
內診により先進せる部位を定むることは困難なるものなり此部は軟塊をなし甚しき特異なる點なし加之分娩長びく時は諸部腫脹し頭部に於けるが如く產瘤を生じ鑑別し難き故

に先づ骨部を求むべし即はち薦骨より尾骶骨に移り行く處の後面に於ては殆んど總ての小兒に於て陷凹ありて其陷凹せる處に尾骶骨を觸れ得べし之れより上に進めば薦骨の棘狀突起の恰も珠數玉を列べたるが如くなるを觸る之により て兒背の方向を知り得べし而して更に指を以て反對の方向に探り行けば肛門に達す肛門は生活せる小兒に在りては括約筋によりて閉鎖せらるゝものにして口腔の如く齒槽突起もなく舌もなく又哺乳運動をなすこともなし其兩側に坐骨結節を觸れ之を齒槽突起と誤ることあれば注意を加ふべし

肛門の前に陰部あり男子なれば陰囊と陰莖とを觸れ女子なれば陰唇を觸るゝも產瘤を生じたるときは確に之を認むること困難なることありとす內診は常に愼みて行ふべし何と

なれば容易に陰部を搔破するの虞あればなり不純尾骶位なれば陰部の前に足部を觸知し得べし

第百十五圖



尾骶位に於ける分娩經過を示す(其一)

分娩の經過は總ての骨盤端位に於て殆んど同一なり只胎兒の體向により耻骨弓の下に右の臀部が先きに現はるゝか左の臀部が先きに現はるゝかを異にし之によりて

第一體向と第二體向とを區別するのみ第一體向に於ては右臀部が會陰部を滑脱するに係はらず左臀部は初に陰裂の内に現はれて此處に止まる若し不純尾骶位なる時は臀部が娩出したる後に下肢は自ら外陰部の前に落つ胎兒の腹面は母の右上腿に向ひ更に進めば兒背は前方に向ひて廻轉をなす陣痛によりて軀幹が追々出でゝ左肩は耻骨弓の下に現れ右肩は會陰の上を超えて出るに至る其間に兒頭は骨盤内に來り矢狀縫合は骨盤上口にては其横徑の上に骨盤腔内に於ては第一斜徑線上を經骨盤下口にては縱徑線上にありて後頭部は耻骨弓の處に止り次に頤部は後方即ち會陰を滑りて顯はれ次に顔面次に前額最後に頤項部は會陰の上を滑りて出ず

第百十六圖

尾骶位に於ける分娩經過を示す(其二)

此時兒背が前方に向はざる時は不正なる分娩經過となる斯る場合に於て胎兒の娩出は醫師の力に依らざるべからず骨盤端位の自然産に於て胎兒の生産することは臍部の娩出と頭部

の娩出との間に時間を要すること少き時に望み得べし然れども陣痛弱く産道の抵抗强くして分娩に時を要する時は生産の望甚だ少し而して足位よりも尾骶位の方が生産の望多し何となれば尾骶位に於ては足位の時よりも大なる先進部にて産道を開張するが故に次で頭部の出る時には足位に於けるよりも廣き産道を通過し且上方に曲げたる下肢によりて臍帶の壓迫を受くることを防ぎ得べきを以てなり

第百二節　骨盤端位分娩に於ける處置

骨盤端位に於ける分娩が自然産として終結する時にも醫師の介助を要するときにも産婆のなすべき介助は會陰保護なり此位置に於ては臀部及び頭部の出る際會陰を保護すべし頭

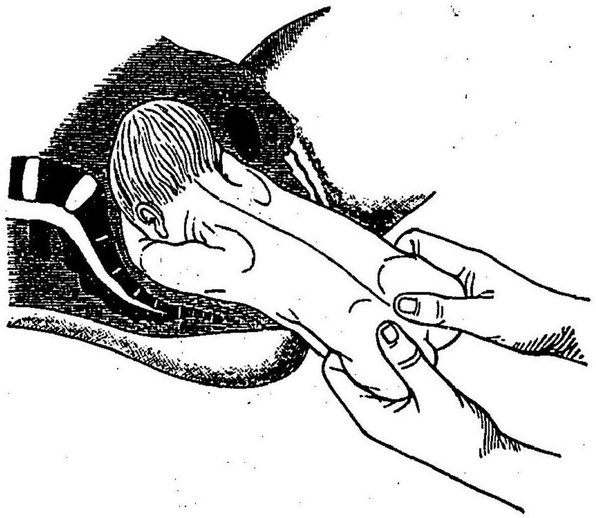
部の娩出する時には會陰部を保護するに便なる爲に兒體を成るべく高く擡げ會陰部を充分によく見得る樣にすべし

骨盤端位の分娩は西洋風の臥床にては横床に於てするを便なりとす本邦普通の寢床にては其必要なし横床とは臥床の長き側を壁の方に向け産婦を臥床の上に臥さしむるには臥床の壁の方に向ひたる側縁に頭を向けしめ其軀幹には少しく蒲團をかひて少しく上體を高くせしめ而して臀部を床縁に近き處に置き其下に一の括り枕を當て下肢は廣げて二個の椅子に載せ猶一の椅子を醫師の爲に其間に置くべし本邦風の臥床にては只臀部の下に枕を入るゝのみにて其上に護謨布又は桐油紙の如きものを布きて羊水等の流出せる時産婦の背部を潤すことなき樣にするを以て足れりとせざるべか

らず

産婆若し骨盤端位なることの診斷をなさば速かに醫師を招かしむべし産婦は其間安靜に臥さしめ決して努責することならしむ其他直腸及膀胱の空虛なるや否やを注意し産床を整へ消毒に必要なるものゝ初生兒の假死に對する處置の準備をなすべし若し分娩經過の有樣により醫師の來診する迄に胎兒既に臍部を顯はしたる時危險の兆あらば産婆自ら分娩を介助し胎兒を挽き出し以て胎兒の生命を救はざるべからず然れども此場合には母兒共に損傷を受け易きことゝ挽出の方法は秩序を守りて最も靜かに最も手早く行ふべきものなることゝを忘るべからず若し然らざれば小兒の生命を失ふのみならず母體にも亦

第百十七圖

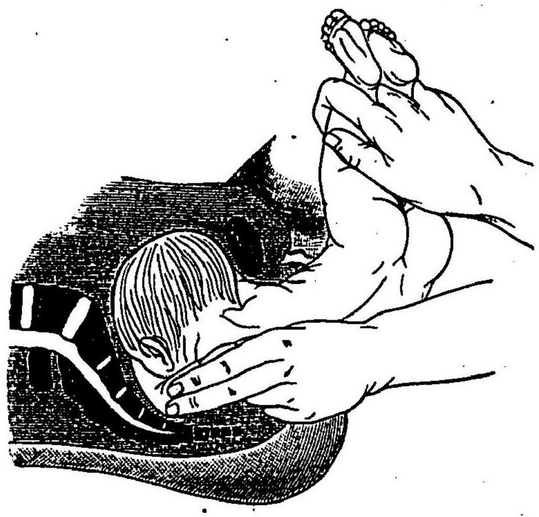


尾部位に於て胎兒を挽出する狀態を示す

障害を來すことあり此法を行ふ時は常に硬き骨部に依りて胎兒を保持すべし

危險を來すことあり産婆の挽出法を試むることを得るは耻骨弓下に肩胛の出る時即ち臍部の陰裂より外に出たる後のみなり餘り早く兒體の牽引を試むべからず之れが爲に屢胎兒の上肢が頭部の傍に於て上方に伸び分娩の

第百十八圖

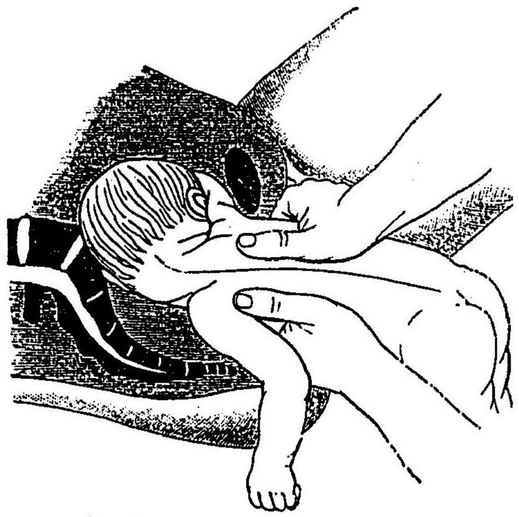


胎兒挽出の時に上方に向へる上肢を解有する樣を示す

後輕き努責を加へしめ又は子宮を摩擦して收縮を促したる後壓迫するも少しも分娩の進まざる時は手指の消毒を充分に行ひたる後兩手掌を以て臀部の兩側に當て靜かに之を下

決して腹部を摑むべからず然らざれば肝臟其他の內臟に危險なる損傷を惹起すべければなり嬰兒既に臍部まで出たる時は産婦に諭して努責せしめ或は子宮を摩擦し或は其上を靜かに壓しなごすべし若し臍部まで娩出したる

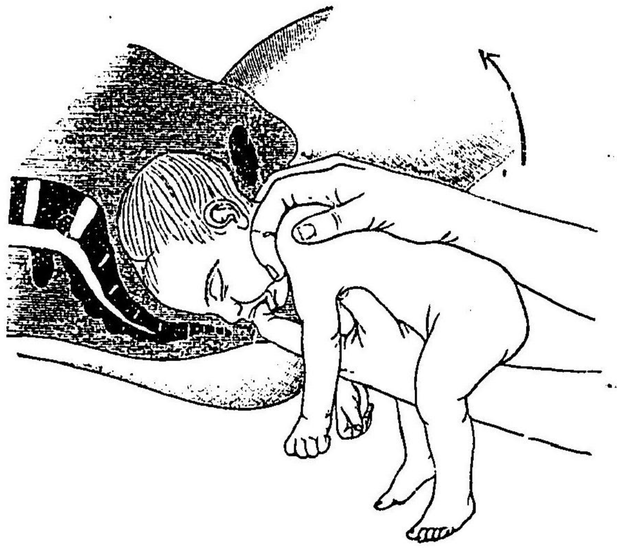
第百十九圖



兩上肢を上方に向へ上方に上げ胎兒の上肢を解き更に他方の肢を解くときは胎兒の軀幹を少し押込みて回轉の狀態を示す

見えざれば上肢は上方に向へるものなれば之を解出すべし即ち第一體向のときは兩足を左手にて攫みて前方に扛げこれと同時に軀幹を母體の右股關節の方へ扛ぐべし然る後右方に抑さへ更に之を上方に上げ恰かも上下の運動を試み若し陣痛弱き時は腹壁より子宮を摩擦し陣痛を促がすべし然る時は兒體は漸次に娩出するものなり而して肩胛部既に娩出し兩上肢猶ほ陰裂の間に

第百二十圖



挽出に際し兒頭を分娩せしむる介助の方法を示す

矢の方向は胎兒を回轉して挽き出す方向を示す

手の指の延ばして陰裂内に入れ兒背より腋窩、上膊を經て肘關節に達し上膊を中指、示指と拇指とにて平かにつかみ而して胎兒の胸面に沿ひて胎兒の手を持ち圓き輪を畫くが如く或は其顏面を拭ふが如くに回はして膊を解き出すべし既に之をなすことを得れば其出でたる膊を軀幹と共に摑み軀幹を舊位置に復したる後少し前上方に兒體を推し

戻し而して更に兒體の左肩を後方に來らしむる爲に兒背を母體の右側に向はしむる樣に廻轉すべし次に右肢にて行へる如くにして左の膊を解き出すべし即ち産婆の右手を以て兒體を母體の左側股關節の方へ扛げつゝ左手を腟内に挿入し前に述べたる如くすべし若し一側の上肢のみ上昇せるとは此方法の何れかを行ふを以て足れりとす、兩上肢解出すれば兒體を産婆の左前膊の上へ騎馬せるが如くに載せ左手の示指及中指を兒の口腔に入れ下顎の上に置き拇指を以て頤部より之を保持すべし此時に下顎と共に舌を保持すべからず然る後右手の示指及び中指を肉叉狀に開きて兒の頭部に後方より掛け此指にて徐々に後下方に向て壓しつゝ左手にて頭を胸に向ひて引かしめ漸次に弓狀に前上方即ち骨盤軸の方向に從ひて挽き出すべし若し初生兒窒息の狀にあるときは直に法に從ひて蘇生せしむべし

第百三節　正規分娩と異常分娩

縱位分娩の内にても後頭位は正規分娩として取扱はれ母兒共に危險を來すこと少きも他の位置即ち前頭位、顏面位、前額位、其他總ての骨盤端位に於ては分娩困難なること多く從て醫師の助けを要することは甚だ多きものにして體勢の異常あるものなれば之を異常分娩として取扱ひ心ず速に醫師を招き其差圖を受くべし只本編に於て之を說くは縱位なるを以て理會に便ならしめんが爲なり

又顏面位に於て頤部の後に向て廻轉せる時の如きは到底人

工産にあらざれば娩出し難し

故に本編正規分娩の部に於て說く處の位置を取れる分娩にても異常の分娩は其狀況を察し適當に母兒の生命の保全を謀る爲に介助をなし且醫師の助けを受くべきことを忘るべからず

且つ前に述べたる如く骨盤端位の分娩に於て挽出法を行ふが如きも母兒に危險を來すの恐あるときには醫師の來診を待つの暇なき時のみ特に行ふことを許されたるものにして止むを得ざる場合の外産婆のなすべきことにあらざれば之を行ふときには殊に謹愼して過なき樣に法則に從ひ處置すべし

第四編

正規産褥の經過及褥婦並に初生兒の取扱法

第百四節　正規産褥

分娩終れば生殖器は漸々に妊娠前と同樣の狀態に復するものなり此回復の爲めには通常六週間乃至八週間を要するものにして此間を産褥と云ひ産褥に在る婦人を褥婦と云ふ

産褥に在る間には生殖器の回復する他に猶乳房より乳汁の分泌を始む既に妊娠中に於ても乳房より初乳と稱する稀薄にして白色なる砂糖水の如き液を搾り出し得るものなれども

分娩後には此液は帶黃白色に見え分娩後第三日乃至第四日の頃に至り乳房强く緊張し腫大して重くなり且其内に何物か充滿したるが如き感ありて乳房を壓すれば乳汁容易に流出す

分娩後の數日間に於て褥婦は疾病に罹り易く又分娩の際にありたる錯誤過失の結果は此頃に至りて始めて現はるゝこと多きものなれば産婆は定むる處に從ひて褥婦を看護し疾病の起り來ることを防ぎ又一方には充分注意して早く疾病の發りたることを認め又之を處置するの機會を失はざらんことを要す故に褥婦の病あることを認むるや否や醫師を招聘することは義務として忘るべからず

健康なる褥婦は自覺快適にして少しも苦痛を訴ふることなく

睡眠靜かなり第二日第三日の頃よりは食慾舊に復す而して外診によりて褥婦の健否を見ることは甚だ必要なりとす健康なる褥婦の脈搏は緩慢にして一分間の脈搏六十乃至八十なりとす

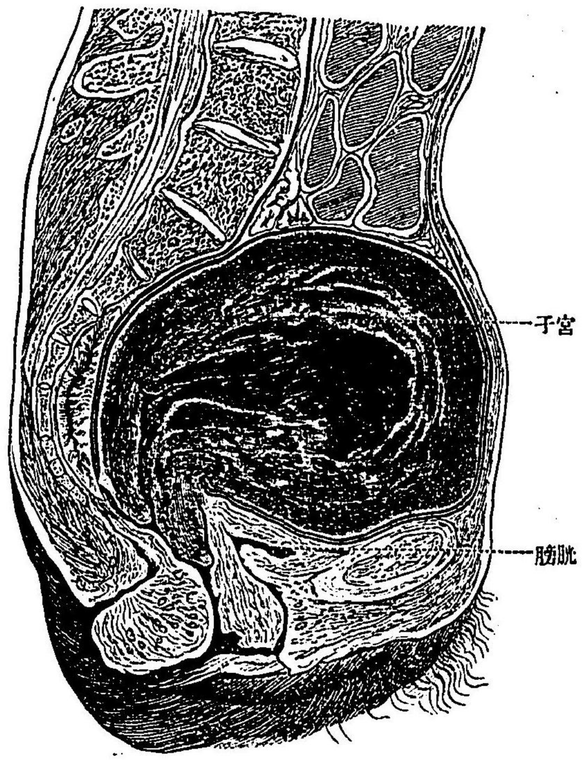
體温は三十六度五分より三十七度五分位迄なり褥婦疾病に罹る時は通常體温及脈搏に變狀を呈す故に産婆は脈搏と體温とを注意して觀察し之によりて疾病の起らんとする徵候を速に發見せんことを務むべし

褥婦の腹部は柔軟にして弛緩し彈力なし子宮は硬き球狀體となりて耻骨縫合の上に觸る

分娩を終りたる後には子宮は小なる兒頭の大さを有し子宮底は臍部或は一指横徑位其れよりも上に達し子宮の内面には

脫落膜の殘部を附着し胎盤の附着したりし部分は出血ある創面を呈するも漸次に産褥經過の中に於て癒ゆるものなり

第百二十一圖



産褥第一日の子宮を縱斷面にて示す

子宮の下部及腟部は緩く垂下す分娩の直後には極めて容易に全手を子宮内に挿入ん得べし日を經るに從ひて子宮收縮し子宮腔は益々狹小す又一方には子宮筋肉の大部分は變化して吸收せられ萎縮す之に應じて子宮底は日々に下降し第五六日の頃には恰も臍窩と耻骨縫合との中央位にありて第九日乃至第十日頃には最早耻骨縫合の上に觸るゝこと能はざるに至る然れども經産婦にありては初産婦よりも此變化の來ること徐々なり此收縮の甚だしき時即ち分娩後第一二日等に於て陣痛の如き痛を發す之を後陣痛と云ひ異常なるものにあらず又哺乳時に後陣痛あることあり

子宮收縮と同時に子宮内より脫落膜の殘部を血液及び粘液等と共に排出す之を惡露といふ始めは血液樣にして漸次肉漿

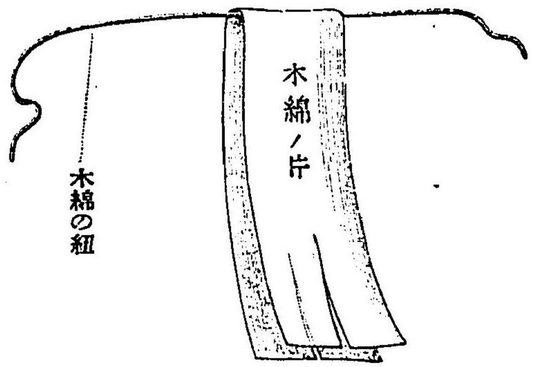
様となり次に混血粘液様次には混膿粘液様となる通常血様惡露は二三日にして肉漿様となり五六日にして混血粘液様となるを通常とす混膿粘液様の分泌物は其量漸次減少しつゝ尚數週間續くものなり又子宮膣部膣及外生殖器にも重要なる變化あり分娩の時に生ぜし創傷は治癒し生殖器は縮小し弛緩せる膣部は固くなり子宮口は閉鎖す然れども子宮は全く舊の如く收縮せずして妊娠前に比すれば少しく大なり、子宮口には瘢痕と裂傷の治癒せるものとを殘し爲に凸凹不平となり膣は皺襞を失ひ滑澤となり弛緩す、膣口も亦弛緩す、健康なる褥婦の皮膚は在褥中多量の發汗の爲に濕潤し且柔かなりこの汗を褥汗と云ふ

第百五節　褥婦の處置並に看護

産褥の經過を佳良ならしめんと欲せば安靜と清潔とに注意することを要す分娩終れば外陰部に附着せる血液、粘液の如きものを丁寧に拭ひ去り尚清潔なる布片又は綿を以て洗ひ清むべし斯くして後四角に切り殺菌したる綿蒲團又は綿紗を壓抵布として外陰部に當て之を丁字帶にて押へ置き且腹帶を施すべし丁字帶は木綿半幅位のもの長さ二尺餘りの切れを二つに折り其折目に細き紐を挿み其紐にて腰部に纏ひ其一方の端を前に取りて之を紐の間に挿むなり(腹帶は後に說くところを參照すべし)而して臥床の上には新しき下敷を布くべし

褥婦は初七日乃至十日間は主として仰臥の位置をとらしむべし然れども子宮の收縮佳良にして惡露も亦過多ならざるときは第二三日の頃より後は時々側臥の位置をとらしむべし之れ産褥に於て子宮の舊態に復する爲に必要なり

第百二十二圖



丁字帶の圖

衣服は下着と寢衣とを用ゐ寬濶なるを宜しとす夏に於ても冬に於ても被蒲團は適當に温保するを目的とし成るべく輕きを宜しとす而して僅に不潔となりたるときにも直に知れ得る爲に下着又は蒲團の敷布等

は白きものを用ゐて度々取り替ゆべし不潔なる臥床の中に居らしむる習慣は甚だしき誤と云はざるべからず固より此等の被布、下敷及び下着を替ゆる前に寒冷なる時候なれば必ず之を温むることを忘るべからず又臥床を交換せんとするときは一方に用意を調へ置きて靜かに之に移すべし(下卷を參照すべし)

褥婦の在る室は空氣の流通よく夏季に於ては晴天ならば窓を明け放ち冬季に於ては隣室の窓を開くを宜しとす賊風の入るは宜しからず又叨りに室内を暗黑ならしむるは宜しからず室温は攝氏二十度位なるべし其他室内の空氣を不潔にすべきことは之を避くべし

身體を安靜にする外に猶**精神の安靜**も亦必要なり故に分娩

後八九日間は家事の指圖其他精神を勞すべきこと及び强き感動を起すべきことは之を避けしめ訪問を謝絶し褥婦を煩はさゞるを宜しとす又褥婦を甚だしく感動せしむべき談話等を慎むべし

褥婦の看護に臨み大切なる規則として遵守すべきは分娩の際に於けると同じく消毒の法則を嚴守することなり之れ産褥中に於ても亦種々の細菌により傳染を來し之が爲に病を起すことあるものなればなり

産婆は初週の内に毎日二回少くとも一回褥婦を訪ふべし此時産婆は褥婦の健否を精密に觀察すべし而して褥婦自らの感覺如何なりや種々の疼痛はなきや大小便の通利は如何なりや等の事を褥婦に尋ぬべし

次に褥婦の體温と脈搏とを檢すべし然る後手指を充分消毒し洗水器に微温の三%の石炭酸水又は一%のリゾール水を充たしたる後丁字帶及前に當てたる綿を除去すべし而して之に附着せる排出物の色と量と臭氣とに注意し且丁寧に外陰部を洗滌すべし然れども醫師の命なくして濫りに腟洗滌を行ふべからず洗滌に際し産婆は創傷表面の色、出血の有無、浮腫の有無、外陰部の腫脹の有無等に注意すべし總て使用して不潔となりたる綿布片等は燒棄べし

褥婦は其下腹の弛緩せるが爲と、尿道の壓挫せられたる爲と、臥位に在る爲めとによりて排尿し難きことあるものなれば分娩後は毎三時に尿器を與へ或は下腹に濕温罨法を施すべし若し此等の方法を行ひて利尿なき時はカテーテルを用ひ注

意して之を排泄せしむべし若し大便の通利なき時は二三日の後に至りて灌腸を行ひ糞便を排出せしめんことを試むべし而して後尚便秘せるときは其狀況によりて毎日或は隔日に灌腸を行ふべきも成るべく自利せしむるを宜しとす便通後は常に外陰部と會陰肛門の部を丁寧に洗ひ新しき壓抵布を外陰部に置くべし

褥婦若し後陣痛の強きを訴へ安眠を得難きが如きときは子宮の存せる下腹部に濕温罨法を施すべし若し之を行ひて輕減せざれば醫師の指圖を乞ふべし

分娩後は腹壁甚く弛緩し決して以前の如く緊張せず弛緩せる腹壁は後に至り種々の困難を惹き起すことあるものなれば分娩終れば直に麻又は木綿の布片を數枚重ねて之を下腹の

上に當て腹帶を施すべし又産褥に在る間のみならず尚其後までも木綿又はフラネルにて下腹部を卷くを宜しとす

食餌は初一二日間は主として牛乳、肉汁又は粥湯の如き流動性のもの又は半熟の鷄卵の如きものを與ふるを宜しとす第二日又は第三日よりは漸次に常食に移り第二週の始には殆んど常食を用ゐしむべし然れども成るべく消化し易きものを用ゐ下利を起し又は便秘を來し易きものなどは之を避くべし固より食物は平素の習慣に從ひて調理せしむべく且異常あるときは醫師の指圖を受くべし麥酒又は葡萄酒の如きものは飲用せる習慣あるものには第二週より後には少しく用うるを得べし

褥婦が産褥を去り得べき時期は子宮の收縮を標準として決定

すべし若し子宮底を耻骨縫合の上に觸るゝこと能はざるに至れば褥婦は離褥して可なり、この時期は通例分娩後第十乃至第十四日の頃に當るものなり然れども決して粗暴なる勞働等をなすことなく徐々に褥を離れしむべし若し早く離褥するときは子宮下垂症又は子宮脱出症等の疾患を起す恐ありとす夏季にて佳良の天候ならば既に三週にして産室を去るも可なれども冬季に於ては四五週以上産室に在りて感冒を防ぐを宜しとす

第百六節　經産の鑑定

在褥中に諸器宦全く回復するものにあらず産褥を離れて後までも變化を殘す之れによりて婦人が既に曾て分娩せしこと

ありや否やを確定し得べし

經産婦の乳房は弛緩して下垂し下腹部も又弛緩す腹部の皮膚には二種の妊娠瘢痕を見る其新しきものは帶青赤色を呈し舊きものは白色にして光澤あり其他陰裂は哆開し其間には往々膣の下部を見ることあり陰唇繫帶には屢瘢痕を有し處女膜は連續せる皺襞をなさずして處々斷裂し又は數個の小なる肉樣塊をなす膣腔は廣がり皺襞少く且つ粘滑にして會陰部は柔靭なり子宮膣部は圓筒狀をなし子宮口は鋸齒狀となり大小の瘢痕を見る猶第七十七節を對照せば詳しく經産婦の狀態を知ることを得べし

分娩の後長く時を經たるものに於ては茲に述べたる如き諸徵候を見ること能はずして婦人が曾て分娩せしことありや否

やを鑑定すること益困難となり或は殆ど確定すること能はざるに至る若し最後の分娩の後數年を經て復た分娩することには膣並に外陰部共に硬靭となり初産と同じき經過を取るに至る然れども分娩後十日に達せざる前に於て經産なるや否やを決定すべき場合に産婆は産褥に於ける變化即ち乳汁の分泌、下腹部の弛緩、子宮の膨大、悪露、陰部に於ける新創傷等を見れば容易に之を定め得べし十日以上を經過したる時は其鑑定困難なること多し

第百七節　初生兒の看護

初生兒の纖弱なる身體は全く特別なる注意を要す若し看護上些細なる注意を缺くときにも其爲に小兒の死亡を招くが如

きことあり故に若し病を發するか或は其疑ある時は直に醫師を招くべし

第百八節　初生兒の營養

小兒に最も適當なる營養物は母乳なり故に萬止むを得ざる事情なき限りは小兒の爲にも、母親の爲にも、母親自ら小兒に授乳すべきなり母親の授乳すべからざるは全身病あるか乳嘴の構造に著しき異常あるか乳嘴の疾病ありて哺乳せしめ難き場合なり、肺結核、脚氣、精神病或は癲癇の如き病氣ある時は小兒に授乳せしむべからず又母親自ら疾病ありと感ずるか、虚弱を感ずる時にも授乳せしむるは宜しからざることあり斯る婦人は授乳すれば衰弱を來し且小兒も發育不充

分にして病氣に罹り易きことあり若し乳頭の陷沒せる乳房を有する時は授乳に適せず斯る場合には扁平乳嘴を有せる時と同樣吸乳器によりて授乳すべし

又哺乳の爲めに甚だしき疼痛を起し又は乳嘴に皹裂を生じたる時にも吸乳器を用うるを宜しとす

總て産婆は母の身體の健否を確定することを得ざるものなれば授乳の可否を定むるが如き時には醫師に診察を乞はしむべし

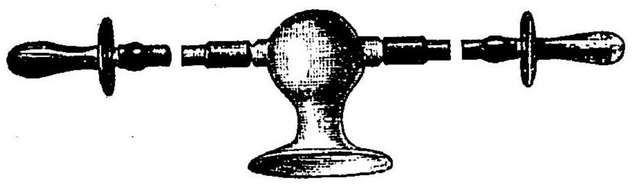
婦人が授乳に適するは分娩後八乃至十時を經たる後なれば其頃に始めて小兒を抱かしむべし

産褥の初二三日間は初乳を分泌し其量不充分なれども哺乳作用が乳嘴を刺戟し漸次に其量を增し第四五日に至りては既

に普通の乳汁を分泌するに至るものなれば規則正しく授乳すべし初乳をあら乳なごと稱して小兒に用ゐざるは自然の妙機を用ゐざるものにして愚の甚しきものなり而して初乳を用ゐずしてまくり其他の藥劑を與ゆるは必要なきのみか往々危害を來すことあり

小兒薄弱なる時は營養上困難を引き起すこと屢々あり此時には第百二十三圖の如き吸乳器を試むべし此器は二つのゴム管を備へ一端に於て母が吸ふ爲に乳汁は硝子器中に流れ入り小兒は他端に於て僅少の力によりて乳汁を吸ふこと

第百二十三圖



兩端に吸子を具ふる吸乳器の圖

を得るなり若し小兒甚だしく薄弱にて哺乳をなし得ざる時は分娩後直に匙を用ゐて養ふか或は硝子の球を備ふる處の吸乳器(第百二十四圖)を以て乳を吸ひ出し温めたる匙を用ゐて之を小兒に與ゆべし

體量二千瓦以下の小兒は半時間又は一時間毎位に授乳し母乳一茶匙(即ち五瓦)内外を與へ漸次增量すべし成熟せる嬰兒には後に示す如く二三時毎に一回の授乳をなすべし

弱き小兒は哺乳不充分なるが故に母又は乳母の乳汁の分泌漸次に減少し終に絶ゆるに至ることあり故に斯る場合には母は强壯なる他の小

第百二十四圖

吸乳器の圖

兒に授乳し乳母ならば自身の兒に吸はしめて乳汁分泌を繼續するを宜しとす

産婆は又褥婦に諭し次の如くに授乳せしむべし即ち分娩後の第一二日は褥婦が最も安靜になし居るべき日にして此日には褥婦は一方の側に傾き其側の上膊の上に小兒を置き輕く胸に押しあて之に乳房をふくますべし大概の場合には小兒は乳嘴を含みて直に哺乳の運動をなすものなり哺乳の間に小兒は鼻にて呼吸すゝされど若し誤りて乳房にて小兒の鼻孔を塞ぐことあれば小兒は空氣を得んが爲に直に乳房を離すものなり故に哺乳中は小兒の鼻孔を塞がぬ樣に注意すべし之を防ぐ爲に示指と中指とをひろげて其間に乳嘴を夾み其指にて乳房を壓し乳を搾り出す樣にするなり又屢〻小兒は

直に乳嘴を含まず或は乳嘴を小兒の口に入るゝも哺乳運動をなさゞることあり斯る時には少し乳を搾り出して小兒の口に入れ與ふれば直に哺乳を始むるものなり又此目的にて乳嘴を砂糖水にて濕すも可なり

授乳は褥婦が産褥に臥す間は側臥の位置に於てすべきものなれども起坐するを得るに至れば決して臥位に於て授乳することなく常に起坐して哺乳せしむべし夜間睡眠中と雖も必ず起坐せしむべし

凡て不潔なる乳房にて哺乳せしむべからず清潔は育兒上決して忘るべからざることとなり、授乳する前に其度毎に母親は乳嘴及乳暈を清水に浸したる布片にて拭ふべし乳嘴に附着せる乳汁の變化する爲に其部分の不潔となることを避

くる爲に授乳後にも亦乳嘴を清潔になし置くべし又授乳の前後には必ず軟かき布片を用ゐて徐かに小兒の口を清むべし粗暴に拭ふことは却て害あり

授乳には兩側の乳嘴を毎回交互に含ましむるを宜しとす嬰兒は通常哺乳すること十五分乃至二十分時にして乳に飽きて眠に入るものなり然れども薄弱なる小兒は飽飲せずして數度の强き哺乳運動を爲したる後直に睡眠するものなり斯る時には母は輕く小兒の顎に觸れ又は乳嘴を引き出し挿し入れなどして成るべく長き間小兒を醒覺し哺乳を多からしむべし

小兒には充分に哺乳せしめざるべからず何となれば哺乳充分ならざれば早く空腹を訴へ啼泣し始むべく此時に小兒に授

乳することは實に不規律に進む第一歩なればなり清潔の外

授乳時間の正しきことは小兒養育上最も必要なることな

り母は規則として晝間に於て初め一二週間は二時間毎に其後は三時間毎に夜間は四時間毎に一回授乳すべし小兒は次の哺乳の時迄に之を消化し次の授乳に由りて再び胃を充すものにて小兒は此時間充分よく耐え得るものなり時間を守らず授乳すれば小兒は直に消化障害を起し腸胃の疾患を起し泣き且つ不安となるものなり授乳中の婦人は風邪に罹らぬ樣に心がけ且乳房は温く保つべし騎馬、舞蹈を禁じ、強き飲料を飲むべからず食物を多量に取り且特に飲料を多量に取るを要す(牛乳、肉汁、茶の如き)又毎日便通ある樣にし若し秘結する時は灌腸を行ふべし酸き食物を取ることは乳兒には全

く無害なり授乳中の婦人は以前慣用せし食物は概ね食して可なり、豆類などを懼るゝはいはれ無きことなり又若し授乳中に月經の來ることあるも小兒の消化其他に障りなくば續きて授乳して可なり、而して授乳中に交接を禁ずるを可なりとす授乳婦更に妊娠すれば小兒を離さゞるべからざればなり

第百九節　小兒の沐浴

第一年に於ては毎日小兒に沐浴せしむるを宜しとす初の間は産婆自ら沐浴の世話をなし且褥を離るゝときは如何にして沐浴せしむべきかを褥婦に教ふべし

沐浴をなす室は餘り強き空氣の流通なきをよろしとす冬季に